
独立アイドル艦隊奮闘記

八幡 P

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独立アイドル艦隊奮闘記

【Nコード】

N8574P

【作者名】

八幡P

【あらすじ】

伊豆半島は下田を母港とする、実験艦や捕獲艦等、規格外の艦艇と二線級士官、女子兵、女性士官等の色物で編成された独立特務実験艦隊。通称「独立アイドル艦隊」

その噂の艦隊に、開戦迫る11月、一人の参謀長が配属された時から物語は始まる。

独立アイドル艦隊出撃せよ！

プロローグ 決戦の海へ（前書き）

- ・この小説はアイドルマスターを原作とする架空戦記です
- ・ご意見ご感想ご要望につきましてはお気軽に、かつ紳士的にどうぞ
- ・なお、特定キャラに対するお約束米の使用は節度を持って、ファンの逆鱗に触れないようご注意ください
- ・この作品はフィクションです。実際の国家、団体、人物とはあまり関係ありません
- ・何名かキャラが崩壊しています。許せない方は回避してください

スペシャルサンクス

山口多聞先生（P）

and YOU！

それでは、激動の三年間、戦場の海を駆け回った少女たちの記録を、どうぞご覧ください。

プロローグ 決戦の海へ

昭和19年10月 艦隊泊地

プロデューサー

艦橋から外を見やると、戦艦や空母、巡洋艦に駆逐艦がずらりと並んでいるのが見えた。この内何隻が生きて日本まで帰りつくことができるのだろうか。

何せ、敵味方あわせて、それぞれ20隻もの戦艦と空母が激突する、この戦争最大にして最後の一大艦隊決戦が始まるうとしているのだ。少々感傷的になるのも無理はあるまい。

と、一人頷いていると、誰かが後ろから歩いてきた。

この声はあいつかと思いながら振り向く。

「プロデューサー、やはりここでしたか」

思った通りの人物がそこにいた。

始めはプロデューサーと呼ばれてもピンと来なかったが、もう慣れた。そういえば彼女も、最初からすれば随分変わったものだと思う。変わらない所もあるが。

「少々、ご相談したいことがあるので、今よろしいですか？」

「ん、わかった」

とりあえず了承の返事を返し、また外を眺める。

「会議室で待ってますね、プロデューサー。早く来てください……ね」

彼女が去って行く足音を聞きながらまた思いに耽る。

思い返せば、俺がこの艦隊に着任してからもう3年もたつのだ。

あの時は、まさかこんなことになるとは思わなかったのだが。

俺がこの艦隊に参謀長として着任したのは、開戦迫る昭和16年、晩秋のころだった……

第1話 始まり

昭和12年7月、盧溝橋での衝突に端を発した支那事変は、当初1ヶ月で片がつくとされた。しかし国民党は予想外の抵抗を見せ、戦鬭は長期化した。

それに対し日本軍は、米英からの援蒋ルートへの遮断をもって対抗、沿岸部と長江・黄河流域を抑え、昭和15年にはフランス政府との協定により北部仏印（現ベトナム）に、翌16年には南部に進駐した。

それに対し英米蘭の三ヶ国は石油禁輸及び通称条約の破棄で応じ、太平洋の緊張は嫌が応にも高まった。

昭和16年11月2日

伊豆 下田

ここに母港をおく独立特務実験艦隊。

元々は新兵器、鹵獲艦のテストを任務としていたが、軍縮期には条約逃れの隠れ蓑としても利用されてきた。

しかし、この艦隊の特徴は実験艦がてんこ盛りなことでも、明らかに日本艦で無いフネが所属していることでも無い。

その証拠に、海軍内でも滅多にこの艦隊を正式名称で呼ばないのだ。

そんな実験艦隊に一人の少将が配属された。

まだ少将としては若い。

（……………ここが、俺が参謀長をすることになる独立アイドル艦隊司令部か……………）

そう、この艦隊は、その異名が示す通り、海軍兵学校女子部を卒業した女子兵や女性士官の殆ど唯一の配属先なのだ。

ただ、男にとつては完全に左遷先であるのだが。女の子いっぱいでも誰も行きたがらない、というのがそれを裏付けているだろう。

口の悪い者などは、『アイドル IDOL』艦隊ではなく『idli（役に立たない）』艦隊だ、などと言うこともある、例えば海軍内での地位もわかるというものだ。

アイドル艦隊 艦隊司令部

約束の場所にたたずむ先ほどの男。

そこに、勝手知ったる様子でもう1人、少将が歩いて来て声をかけた。

「やあ、聞いたよ君。いろいろやらかしたらしいね？」

「お久しぶりです武田先輩。いやはや、面目ない」

この人は武田蒼一少将。アイドル艦隊の前参謀長だ。

この人も若い頃はやんちゃしたらしく、それで左遷されて来た。

「ところで、武田先輩だけしかいないのですか？ 他の……高木司令は？」

「ああ、日程の手違いでね、先に演習に出てしまったんだ。迎えを寄越すと言っていたがね」

そのとき、爆音と共に1機の単発機が近くの小さな飛行場に降りて

きた。

「来たようだね。いいかい、この部隊の艦には確かに癖がある。だが、その癖さえ飲み込めば素晴らしい艦性能を発揮する。ようはど
う艦や乗員の特性を見抜くかだ。そのためにこれを用意した。存分
に役立ててくれ」

そう言うて無地のファイルを差し出す。

「兵器のスペックや指揮官のプロフィールなんかを纏めておいた。
わからないことがあったらりっちゃんや高木司令に聞くと良い」

「ありがとうございます」

礼を言つて受け取り、とりあえず小脇に挟んで飛行場へ歩き出す。
後で飛行機の中で読もう。

「礼には及ばん。頑張れよ、『プロデューサー』」

プロデューサー、この艦隊ができたところから何故か、参謀長はそう
呼ばれるのが慣例なのだ。

「それと一つ、打撃艦『由布』は男子禁制だからな。前に女顔の奴
が迷いこんで……」

「どうなつたんです?」

「……『ぎゃおおおん』で『りゅんりゅん』と……」

(なにそれ怖い)

「まあ、みんな良い……楽しい娘たちばかりだよ。掛け値無しに。お、着いた着いた」

先程の飛行機……、パツと見零戦に見える複座……座席が2つ……の飛行機がタキシングしていた。

「彼女は星井美希、中佐で航空参謀をやっている」

操縦席の風防が開いて、降りて来た操縦士が飛行帽を脱ぐと、下から腰まで伸ばした見事な金髪が現れた。

別に、黒髪でない日本人がいない訳ではない。

なぜなら、ロシア革命の影響でそれなりの数、ロマノフ王朝のやんごとなき方々が極秘裏に日本に逃れ、日本名を名乗り生活していることは公然の秘密だからだ。

他にも、例えば伏見宮元帥の秘蔵っ娘などは、体質の関係で銀髪なので『銀色の皇女』などと呼ばれている。それでも黒髪でないのは珍しい。

「星井美希、ただいまお迎えにあがりました、なの」

ピッ、と敬礼する。

（確かに楽しい、楽しくて仕方ないな……）

敬礼を返しながら、えらいところに来たもんだと思うプロデューサーであった。

U
U
<U

第1話 始まり（後書き）

登場人物紹介

武田蒼一 少将

前アイドル艦隊参謀長

プロデューサーの先輩にあたる。

優秀だが性格が災いして飛ばされた。

P 少将

アイドル艦隊参謀長

プロデューサー。本名は不明。

第2話 艦隊旗艦『陸奥』

11月2日 昼頃

伊豆諸島 八丈島上空 高度3500m

プロデューサー

エンジン音も快調に、美希が操縦桿を握る零戦の複座仕様型が飛ぶ。しかしさっきはひどい目に遭った。

「特殊飛行とか体験したい？」

という問いを、猫のようないたずらっぽい笑みを浮かべて投げ掛けられた時点で気付くべきだったのだろうか。

気軽に了承した瞬間、垂直旋回に始まり、3連続宙返り、1000m急降下に急上昇 Gはだいたい4Gくらいかかる、そして急横転を2、3回。

危うく意識がアイキャンフライする所だった。

「プロデューサー大丈夫？ ちょっとやり過ぎたの」

若干心配そうに尋ねてくる。

自覚はあったのね。

「まあ、な。……そろそろ八丈島か？」

「うん。後30分もすれば第1分艦隊の母艦が見えるの。ところでプロデューサー、おにぎり食べる？」

……航空糧食は巻き鮓だと聞いたんだが……もしかして。

「いや、いい。好きなんだろ？ おにぎり」

「そーなの。一日一個食べないと体調おかしくなるの」

中毒かよ！？

グッドコミュニケーション

それから、昼間の星についてなど、面白い話をしてくれた。
視力2.5超のさぶちゃんは見えるの、だそうだ。
なかなか良い娘じゃないか、美希は。

さて、第1分艦隊ってなんだろ？
という訳で、さっき貰ったファイルの最新の艦隊編成のページを見る。

独立特務実験艦隊 艦隊編成
昭和16年9月1日時点

独立特務実験艦隊
司令長官 高木順一朗中将

第1分艦隊 直率
・独立航空戦隊 日高舞大佐
旗艦 空母『陸奥』直率

・独立防空戦隊 如月千早大佐
旗艦 軽巡『梓』直率
第3駆逐戦隊『第101号』『第102号』『第103号』『第104号』

第2分艦隊 音無小鳥少将

・独立打撃戦隊 直率
旗艦 打撃艦『多良』菊地真大佐
打撃艦『由布』萩原雪歩大佐
・独立水雷戦隊 我那覇響大佐
旗艦 軽巡『夕張』直率
第1駆逐戦隊『初靄』『朝靄』『夕靄』『薄靄』
第2駆逐戦隊『令月』『嘉月』『雨月』『桂月』

第3分艦隊 石川実少将

・独立仮装巡洋艦戦隊 直率
旗艦 仮巡『愛国丸』直率
仮巡『報国丸』尾崎玲子大佐 仮巡『護国丸』岡本まなみ大佐
・独立潜水戦隊 直率
潜水艦『第78号』日高愛大尉 潜水艦『伊200』水谷絵理少佐

なるほど、空母戦隊か。

しかしなんだ、軽巡『夕張』が嬉しくなるほど見慣れない艦ばかりだな。

砲術学校教官時代の助教の口癖を借りるなら「面妖な！」ってところか。

そういえば、武田先輩は「女の子ばかり」と言ってたが、何人か男の名前……両方あり得る名前でもあるか。見知った名前もちらほ

らいるし。

「あ、見えてきたの！ 1時方向！」

まだ点にしか見えないが、海の上で目標を探す時はわざと少しずらして、左右どちらかだけ見れば良いようにするというのは本当らしいな。

と、見る間に水平線からフラットな艦影が湧き出てきた。さっきの点は外縁の駆逐艦らしい。

あれが……『陸奥』か……。

独立特務実験艦隊旗艦『陸奥』、その波乱に満ちた生涯の始まりは大正7年、1918年にまで遡る。

大正7年6月1日、横須賀海軍工廠にて、長門級戦艦の二番艦として起工された。

しかし、大正10年に開催されたワシントン軍縮会議が彼女の運命を大きく変えることとなった。

会議で決定された「未成艦を全廃棄する」という条項、そのリストに『陸奥』も含まれていたのだ。

当然、海軍内部では戦艦として竣工させるべきだ、という意見が主流だった。まだ世界に二隻しかない16インチ級戦艦（当時は日本の『長門』とアメリカの『メリーランド』のみ、イギリスは起工すらしていない）であったし、ほぼ完成していることから、どうにか誤魔化せるというものだった。

しかし、次の一言が場の空気を一変させた。

「今なら1対1対0だけど、『陸奥』認めさせたら2対3対2にな

らない？」

確かにその通りなのだ。もし、未完成艦リストの『陸奥』を復活させると、当然、アメリカの未完成16インチ戦艦、コロラド級一番艦『コロラド』と、三番艦『ワシントン』を復活させるだろうし、そうなれば無駄にプライドの高いイギリスのこと、ウチも二隻ぐらい持たせろ、と言い出すに決まっている。

それを受け、日本は本会議で、『陸奥』は完成艦であるが世界平和と各国友好のために廃棄すると表明、歓呼を持って迎えられた。

そして、予想通りイギリスが駄々をこねて一隻の新造を認められ、代償に日本とアメリカは一隻づつ、主砲と装甲を全撤去しての保有が認められた。

かくして、各国は長い海軍休日に入、『長門』『メリーランド』『ネルソン』はビッグ3として君臨し、『陸奥』の主砲と装甲は大事に保管され、船体は実験艦として実験艦隊に送られ、様々な改造を受けることとなった。

『陸奥』の改装・改造は多岐に渡り、艦尾の延長に始まり、新型機関の試験、球状艦首の実験、新型艦橋の実装等々、手を入れなかったところは無いという程であった。

そして、昭和10年、一人の少佐（当時）の転倒に端を発した騒動により、艦橋・煙突が倒壊するという事故が発生、既に条約の期限が切れようとしていたこともあり、新造した方が良いとされ、海軍はそのまま『陸奥』を廃棄処分にしようとした。

しかし、それに対して、空母に改装すべきだ、とする某中佐（当時）の意見を容れた実験艦隊司令長官の具申が何故か採用され、紆余曲折の末、民間最大手の『大亜細亜造船』にて空母に改装され、また島型艦橋の試験や艦橋一体型煙突の実験、解放式格納庫・電探・射撃機（タバルト）の試作品の設置等、またしてもこき使われつつ今に至るのである。

「ん？ あの『陸奥』の横の巡洋艦は？」

空母の横の日本らしくない巡洋艦を指す。

「あれは元フランス艦の軽巡『梓』なの。ちょっとややこしい艦名なの」

ああ、ヴィシー政府から買ったやつか。多分、長野の梓川が命名元だが、女の子の名前みたいだな。どれ、スペックは……

「……排水量7291t、速力32kn、15.5cm砲連装4基、高角砲8基、魚雷12門に偵察機2……優秀じゃないか。装甲は薄いが」

「艦長もそんな感じなの。尊敬してる人なんだけど……」

「けど？」

「二言目には空母、空母って言い出す空母厨なの」

「……」

「だから気をつけるの」

艦隊上空を、味方識別のバンクを振りながら通過する。

……俺の目は飛行甲板に釘付けになった。

「なんじゃありゃあ！！」

なんと、空母の甲板いっぱいに2人の女の子……美希と知らないリボンの女の子……の笑顔が描かれていたのだ。

「あれは乗員の公募で決まった特殊迷彩なの。最後までミキが春香かで揉めたから、不本意だけどツーショットなの」

そう言いながら操縦桿を倒し、空母への最終アプローチに入る。
なんで止めなかった高木長官!?
飛行甲板のなんと痛い……小さいことが。

「今から『制御された墜落』をお見せするね、しっかり掴まってて！」

「え、っ!？」

そのまま、2人の顔の間のワイヤーにフックを引っかけ、リボン付きの顔あたりに叩きつけるように着艦した。

駆け寄ってきた甲板員に手伝ってもらいながら甲板に降りる……目え踏んづけた……。

艦橋に2人で移動すると舞さんが出迎えてくれた。

「久しぶりね、元気にしてた？」

「ええ、そちらも相変わらずですね」

この人は、元同僚の友人で何回も飲んだことがあるが……破天荒な人で、若干苦手だ。

「これからよろしく頼むわね、プロデューサー君。もしこの『陸奥』や娘に何かあったら許さないからね?」

「無論です。……ときに高木長官は?」

「高木司令長官や1分艦戦隊司令、参謀たちはもう下の会議室に集まってるから、案内するわ。ついてきて」

次は直属の上司と部下に対面か……

つづく

第2話 艦隊旗艦『陸奥』（後書き）

まさかの痛空母『陸奥』

ちなみに、空母の甲板は、それこそ猫の額ほど……飛行場の1割ほどの広さしかなく、そこに張った数本のワイヤーにフックを引っかけなくてはならないのです。

なので、空母への着艦は『コントロールド クラッシュ（制御された墜落）』と言います。

何か意味がわからない単語があつたら言つて頂ければ対応します。

『大亜細亜造船』は、義勇艦隊奮戦録よりお借りしました。
快く使用許可を下さつた山口多聞先生に格別の感謝を。

ご意見感想お待ちしております

第3話 顔合わせ その1

空母『陸奥』 大会議室

プロデューサー

「……以上より、軽巡『梓』及び『101』級駆逐艦の対空射撃は非常に有効であり、88mm砲の高性能も相まって高い戦果を挙げ得ると評価できます」

「なるほど、よくわかった」

「以上で防空戦隊よりの報告を終わります」

瘦身で烏羽色の髪の大佐が無表情で着席した。

確か88mm砲は、陸海軍が共同でドイツから購入した高射砲のライセンズ生産版だったな。

正直、財閥が間を取り持っていないければ陸海軍の装備共用など不可能だったのではないだろうか？

「うむ、少々順番が前後したが、本日、武田君に代わって新しいプロデューサーが来てくれた。さあ、君、こっちへ来たまえ」

げ、もう話終わってたのか。

ともあれ、席をたつて高木長官のもとに歩く。

「よく来たね。道中はなかなか刺激的だったろう？ 実は私も間違つて美希君のおにぎりを食べてしまったことがあってね……」

そう言って苦笑する。

あいつ、高木教官……じゃなくて司令長官にまであれやったのか……
…何と奔放な。

「さて、まあよろしく頼むよプロデューサー。ウチの参謀長業務はきついぞ。何せ、参謀はその4人しかないからな」

「……………はあ？」

確かに、おかしいとは思っていたのだ。

この部屋にいるのは8人。

まず、高木長官、俺（参謀長）。そして舞大佐（航空戦隊司令官兼『陸奥』艦長）と先ほど発言していた胸が飛行甲板な大佐（防空戦隊司令官）。

残りは、『陸奥』の甲板に描いてあったリボン、烏羽色の髪は同じだが胸は超弩級な中佐、金髪アホ毛の美希、メガネでエビお下げ
多分彼女がりっちゃんの4人。

……………連合艦隊だと20人からの幕僚がいるもんだが……………。4人
か……………少ないだろ。

「まあ、各々、しばらく自己紹介でもして親睦を深めるように」

言うだけ言っただけで隅っこに引込んで茶をすすりだした。

まず、参謀ズの中でも上座に座っていたリボンが立ち上がった。

「私は天海春香、首席参謀で戦務と政務もやっています。その、私と
ってもおっちょこちょいですけど、精一杯がんばります!!」

頼むからおっちょこちょいで事故起こすなよ？

で、次はほわつとした雰囲気の人が立つ。おお、揺れた……………アホ毛が。

「三浦あずさと申します、航海参謀やってます。よく方向音痴と言われますが、全然そんなことはありません。よろしくお願いいたします」

絶対ミスキャストだわこれ。
次、次行こう。

「ミキの名前は星井美希。航空参謀で飛行隊長なの。よろしくね」

くそ、かわいいじゃないかおにぎり星人……。
で、仮称りっちゃんな訳だが……スタイル良いな、案外。

「私の名前は秋月律子、その他の幕僚全職兼任。目指すは完全勝利、全力でサポート致しますね！」

心強い限りだが……ちよつと待てよ。

「……サポートしてくれるのは有難いんだが、幕僚全職兼任とはどういうことだ？」

「それについては私が答えよう！」

横から高木長官が口を挟む。

「我が艦隊は慢性的な人材不足でね、それが特に顕著なのが佐官クラスと潜水艦隊なのだよ。佐官不足は兼任させて実務は部下に任せれば良いが、潜水艦隊の定員割れは、伊7・伊8を維持しきれなく

なるほどでね……伊7の乗員をまわしてきたり、伊8で人材を育成したりしているが、定員を満たすのがやっとなのだよ」

なるほど、佐官は少ないが艦長を削る訳にもゆかず、兼任しまくりか……。それだと潜水艦長なんか貴重だな……。それで大尉がいたのか。

見ると、秋月中佐が唇を噛んでいた。そういえば、秋月中佐の専門はなんなんだ？

「あー、秋月中佐？」

「律子で構いませんよ」

「じゃあ律子。律子の専門はなんなんだ？」

「作戦参謀です」

適役だな、なんとなく。

「では私は長官室に引っ込んでいるから、適当に話が済んだら、後で部屋に来るように。話がある」

高木長官が会議室から出て行く。

「さて、私のことはP君良く知ってるでしょ。あとは……？」

「千早ちゃんまだじゃない？ 自己紹介。ほら早く！」

リボンの首席参謀がさっきの瘦身の大佐を急かす。

「……………ちゃん付けで呼ばないでくれる？」

「えー、いいじゃない。千早ちゃんと私は同期なんだしー」

「……はあ……………。……名前は如月千早です。防空戦隊司令官を務めております。以後、お見知り置きを」

こいつがか……。確か空母厨だったな……。

その後、しばらく歓談タイムに入った……

一段落したころ、話の輪に1人入って来なかった千早が気になったので、情報収集してみることにした。

「なあ美希、ちょっと来てくれ」

「何？」

美希を呼んで声をひそめて尋ねる。

（なあ美希、如月千早について教えてくれ。いつもあんな感じなのか？）

（いつもよりぼーっとしてるかも……。でも、だいたい同僚クラスにはあんな感じなの。例外は航空関係の人だけなの。プロデューサーは？）

（俺は砲術屋だからな……）

（やっぱり……。前の、武田Pも苦労してたの。相手が航空戦につ

いて理解が無いと見るや講釈垂れ出すから気をつけて。あ、来たの。ぐっどらつくなの」

顔をあげると、話の輪から外れていた千早が歩いて来た。

「プロデューサー、今ちよつとよろしいですか？」

来たぞ……。こうなつたら己の舌先三寸だけが頼りだ……。

「ああ。なんだい？」

「プロデューサーは、航空機とは、航空戦とは、どんなものだと考えておられますか？」

ド直球ストレートキター！！

「うん、そうだね……」

ヤバイ、ヤバイぞこれは……

……そうだ、空母指揮官や航空派の提督ならどう言つたろうか？

選択肢

1、南雲忠一中将

「航空戦のことには自信が無いからな。わかる奴に任せるよ」

2、小沢治三郎中将

「飛行機は弾丸と考えている」

3、山口多聞少将

「それよりお前、ちゃんと飯食ってるのか？ 胸板全然無いじゃないか」

どうする、俺！？

つづく

第3話 顔合わせ その1（後書き）

『この小説はフィクションです。実際の小説家になろうの作者さんとは関係ありません』

美希「すごく……白々しいの……」

作者「一応、問題無いように連絡つけたから大丈夫」

P「で、この選択肢はどうなるんだ？」

作者「パーフェクト、ノーマル、バッドが1つづつ。バッドは千早がマジで激昂する。よく読めば根拠をもって決められるハズ」

美希「じゃあ公募するの？」

作者「いや、今回はしない。ただ、予想は自由だし、必要があるならボツルートも別伝で公開しようかと。如何でしょうか」

美希「それでは、山口多聞先生の『裏独立アイドル艦隊奮戦記』もよろしくなの」

作者「山口先生による支援小説です。私、八幡と山口多聞先生の間で交わされたメッセージを収録してあります。正直、痛いですがよろしければどうぞ」

ご意見感想お待ちしております

第4話 答え（前書き）

どうしてこうなった。

第4話 答え

「プロデューサーは、航空機とは、航空戦とは、どんなものだと考えておられますか？」

「うん、そうだね……」

ヤバい、ヤバいぞこれは……

選択肢

1、南雲忠一中将

「航空戦のことには自信が無いからな。わかる奴に任せるよ」

2、小沢治三郎中将

「飛行機は弾丸と考えている」

3、山口多聞少将

「それよりお前、ちゃんと飯食ってるのか？ 胸板全然無いじゃないか」

どうする、俺！？

………よし、決めた。

「それよりお前、ちゃんと飯食ってるのか？ 胸板全然無いじゃないか」

「……なっ

」

場の空気が凍り付くのがわかる。

ちらつと美希を見ると、食べ掛けのおにぎりを取り落としそうになつて、なんでよりによつてそれ言うの？ という顔をしている。

仕方ないじゃないか。航空派の提督でまず出てきたんだから。それに、兵学校時代に食と健康が云々とか……。

ええい、ままよ。

「いいか、俺たちはだな」

ふらつ。

まさに、二の句を継ごうとした瞬間、千早の目が左右別々の方を向き、そのまま糸が切れたように崩れ落ちた。

「大丈夫かつ!？」

とつさに抱き寄せて額に手をあてる。

「!？　すごい熱じゃないか！　おい美希！　医務室は何処だ!」

「なっ、ちはっ……あ、案内するの!」

舞さんが開けたドアから金色の閃光が廊下に飛び出して行く。

俺は千早を背負って　こいつ、長身の割りに恐ろしく軽い。それに骨っぽい　いまだに呆気にとられている参謀ズを置いて、美希を追って走り出した。

如月千早

「それよりお前、ちゃんと飯食ってるのか？」

「……なっ」

何故わかったんだろう？ 何日か体調が悪くて朝から何も体が受け付けてくれなかったのを……

あ……なんか急に気が遠くなってきた……身体に力はいらない……

「x、……」

ふらっ

あ……たおれる……

「xかつ!？」

そのままあれよあれよというまにおんぶされた
おおきな……せなかだな……

私の意識は、そこで途切れた。

翌朝

医務室 ベッドの上

如月千早

丸い舷窓から朝日が射し込んでいる。

「ここは……………」？」

白い天井で…………冷ッ、氷嚢が額に乗っている。

「お、気がついたか？」

横を向くと、座って何かを読んでいたプロデューサーがこちらを見ていた。

それは？

「ああ、これか？ 昨日聞いたアイドル艦隊の保有兵器の要目だ……それより、だ」

急に真剣な表情になって言う。

「貴様、40度も熱があったそうじゃないか。俺たちは指揮官なんだ。部下の命を、国家の命運を背負っているんだぞ。その指揮官がそんなフラフラでどないするか！ 気負うのはわかるが体調崩したらきちんと休め」

……………その通りだ。昔、師匠にも同じようなことを言われたのに…………。

「……………はい……………」

プロデューサー

「 どないするか！ 気負うのはわかるが体調崩したらきちんと休め」

「 ……はい……………」

うん、少し厳しい言い方かも知れんが、何かあってからでは遅いかな。

「軍医長の見立てでは3日は安静だそうだ。しっかり養生せい」

「わかりました」

あとは……………そうだ。

「防空戦隊だがな、三浦中佐が臨時で指揮するそうだ。あくまでも臨時だからしっかり体調調整えて戻ってこい」

「あずささんですか……………」

と、ここで悪戯心が頭をもたげてくる。悪い癖だ。

「ああ、あずささんが『梓』の指揮をとる」

「……………」

下をむかれてしまった。

第4話 答え（後書き）

作者「正解は

小沢ルート バッド

南雲ルート ノーマル

山口ルート パーフェクト

でした」

美希「夕食の味噌汁を吹いた人がいないか心配なの」

作者「大丈夫だろ……」

響「自分たちの出番はまだか？」

作者「もうちょっとだから……」

美希「この分だと開戦前に10話はいくの……」

「ご意見ご感想お待ちしております」

第5話 3年の意味

空母『陸奥』 会議室

「ふむ……。如月君には少々無理をさせていたようだね……」

「ええ、元々無理しすぎるくらいがあつたとはいえ、40度とは……
気づいてあげられなかったのが悔やまれますわ……」

騒ぎを聞きつけて戻ってきた高木長官と日高舞が頭を抱える。

「でも、さっきのプロデューサーかつこよかったです。やっと
運命の人に出会えたかも」

「えー、あずささん、いい歳して運命の人ってのはちょっと……」

「春香、ほつといてあげなさい。でもまあ、身のこなしは素早かつ
たわね。プロデューサー」

2人が頭を抱える横で、参謀の3人は直属の上司の話題で盛り上が
っていた。

「ときに司令、プロデューサーの他にもう一人誰か着任するのでは
？」

「そつだそつだ。律子君、たしか優秀な情報幕僚が欲しいと言つて
いただろう。一人ティンときた人材がいたからスカウトしてきたの

だよ。たしか今日着くはずだが……」

皆の視線がなんとなく閉じきっていないドアにむかう。

「失礼します。高木司令はここだと伺ったのですが」

「おお、来たか。入りなさい」

半開きのドアをあけて、30代半ばぐらいだろうか、大尉の階級章をつけた丸眼鏡の男が入ってきて敬礼する。

「失礼します。本日付で、独立特務艦隊司令部付き従官となります、志摩大尉であります。着任の挨拶に参りました」

「ちょうど入れ違いだな。すまない、今さっきまで全員居たのだがね」

高木長官の答礼にあわせて手を下げつつ、志摩がちらつと下を見た。

「おや？」

床からなにやら書類を拾いあげる。

「どう？ あなたの評価が聞きたいわ」

律子が、先ほど千早が落とした報告書の資料を拾いあげた志摩に問いかける。

そうですね……、と書面を睨んでいた志摩が顔をあげる。

「距離が足りなく思います」

「距離？」

はい、と頷き続ける。

「88ミリは従来の127ミリや新式の100ミリの砲より射程がありません。ですので、どうしても防空陣形を小さく作る必要が生じます」

「あら〜？」

あずささんが笑顔のまま首を傾げる。

「ちょっとこれは大変かもしれませんね？」

「ええ、この陸奥に近すぎて、下手に運動が出来ないんです」

「だから、小さくまとまった艦隊回避運動をとらざるをえないし、下手をしたら衝突事故を起こしかねない。ですか〜？」

あずささんが航海参謀らしい懸念を表す。

「それから、口径の小ささは危害半径を狭めます。それを補うための弾の消費が怖いですね……正直、理想倒れ感が……」

律子が下を向いてぶるぶる震えている。
少々怪訝な顔をしつつ、志摩が続ける。

「小さくて取り回しが利くのが必ずしも最適解ではありません。なるべく大きく、バランス良く、かつリーズナブルでも良いのでは？」

「もうだめ、耐えらんない！ あははっ！ 千早が居なくて良かったんじゃないですか、司令？ まったく真逆じゃないですか」

「だろう？」

高木司令と律子が笑いあう……。志摩はあれで良かったのか、という顔をしている。

「秋月律子よ、あなたの直接の上官になるわ。リーズナブルは特に気に入ったわ」

「……よろしくお願いします」

「紹介するわ、こちらから」

律子が隣にいた2人をさす。

「三浦あずさです」

「天海春香ですっ！」

「艦長の日高舞です。陸奥へようこそ、歓迎するわ」

「ありがたく存じます」

すっ、と3人に頭を下げる。

それから、プロデューサーと美希を待とうということになり、何処からかお菓子を取り出され、すっかりくつろいだ雰囲気になる。

「どうぞ。雪歩ちゃん程美味しくはないですけど」

あずささんがお茶を淹れて配る。

「ありがとうございます……しつかしまあ、最近きな臭いわね」

「戦いたくは、ないのですけれど」

律子の言葉に、お茶を配り終えたあずささんが眉をひそめる。

「大尉、軍令部で何か聞いてない？」

律子が志摩に聞く。

「……正直なところ、絶望的かな、と」

永野さん曰く、もはや運命だ、と若干諦めの入った表情でいう。

「やっぱりはじまっちゃうか。アストリアが来たときは、もしかしたら、と思ったんだけどねえ」

・米重巡『アストリア』

客死した駐米大使齋藤博の遺体を日本まで運んできた艦だ。日米交渉間最後の蜜月とも言われる。

「どこか、で仲直り出来れば良いんですけど」

と、あずささんが首をかしげ、長い髪が肩にかかる。

「でもなあ、イギリスともでしょ？ まともに決戦出来ないじゃない」

基本的に帝國海軍が望む艦隊決戦は、水雷戦隊、機動艦隊に潜水艦や陸攻隊まで全てを動員した漸減作戦の後にあるものである。

だが、巡洋艦を中心とする第二艦隊各艦は南方作戦のために持つてかれる。

これでは勝てない。

「どこか奇襲でもするつもりかしら」

りっちゃんの眼鏡がキラリと光った。

「日本海軍の伝統で考えると、やっぱりハワイ、オアフ島の真珠港でしょうか？」

「あずささん、いくらなんでもそれは投機的に過ぎると……戦争は博打じゃないんですよ？」

「でも、五十六さんの賭け事好きは有名ですよ？」

「これは一本取られたね、律子君？」

高木長官がにやりとする。

「っ……。……そうそう、何処から彼を引き抜いてきたんですか？」

「いやいや、彼には新婚の奥さんが居てだな……。うちに来ると言って来てたんだが、代わりに彼がな……」

「え？彼、妻帯してんですか？」

「まあ！」

あずさんが満面の笑みで手を合わせる。

「ちょっ……高木長官！」

「いいじゃないか、別に変な話でもなかるう？」

律子がジト目で志摩を見つめる。

「奥さんのために全部投げ出してこっち来たわけ？」

「ぐっ……」

それをいわれると、とか、その……なんだ……と、口ごもる。

「いいじゃないですか、素敵です」

「そりゃ……悪いとは思わないですけど、ねえ？」

会議室の面々の生暖かい視線が志摩に集まる。
その時。

「ただいまなのー！」

「只今戻りました」

ようやく2人が帰ってきた。

「お帰り。で、如月君の様子はどうか？ 高熱で倒れたと聞いたが」

「ええ、医務室に担ぎ込みましたよ」

「軍医さんの見立てでは、3日は絶対安静らしいの」
「ふむ……」

顎に手をあて考え込む高木長官。

と、プロデューサーが、見知らぬ大尉に気づいた。

「長官、その……」

「おお、忘れる所だった。志摩君、彼等がさっき言ったプロデューサー君と美希君だよ」

「……志摩大尉であります。よろしくお願いします」

「こちらこそ」

「よろしくなの」

そしてまた、新たにPと美希を加えて茶飲み話のような様相を呈しつつあった。

「ときに長官」

「なんだね？」

プロデューサーが高木長官に話し掛ける。

「先ほど、話があると……？」

「ああ、その話か。そうだね、………20年も前だったか、面白い意見を目にしてね……曰く『支那、朝鮮、シベリアを領有しようと思わないなら、我が国はどこからも侵略される心配は無い』と。さらに『日本の国防の為に支那が必要なのは無い。支那の為に日本が国防をせねばならないのだ』と。どう思うかね？」

プロデューサーが慎重に言葉を選んで答える。

「……かなりの極論、でしょうが……満州事変以来の国際的孤立を鑑みるに、……一理あるかと」

“満州事変”

1931年9月18日、関東軍作戦参謀の石原莞爾らが首謀して引き起こされた柳条湖事件を発端とし、33年5月31日の塘沽停戦協定に至る、日本と中国（国民党）との紛争である。

「首謀者と噂される関東軍の作戦参謀も、帝都動乱の鎮圧や支那事変の拡大を抑えた点は良いんですが、勝手に軍を動かしましたからね……」

「ああ。彼は非常に切れる男だ。だが……国際感覚と人心は掴みきれていなかったね。だから、武藤を切った……いや、刺し違えたのかね」

「えー、でもカンチは良い人だよ？　すごく変人だけど」

横から美希が口をはさむ。

「なんだ、知り合いか？」

「うん。昔、とってもお世話になったの」

美希君よいかね、と咳払いする高木長官。

「あの事件からこつち、その後の処理の不味さも相まって、信用を失墜させてしまったからね……。我々は、それしか持たないのに」

室内を沈黙が支配した。和やかな雰囲気は消え去り、だれも、身動きひとつしない。

皆の五感が高木長官に集中している。

「つまり、だ。君には、戦略的な、大局にたった視点で作戦をたてて欲しいのだよ。」

私は、普段から『生き残れ』と、『名より命を惜しめ』と、兵たちに訓示している。

無論、異端だというのは承知している。『飛行機を棄てる、帰って来い』と、言った時には流石に問題になりかけたがね」

ふふ、と笑い、時計をちらりと見る。

「む……。うむ、決して私とて明確な答えは出せていないのだが、ひとつだけ言えることがある。」

山本長官は『日本が戦えるのは1年から1年半』と、おっしゃった。だから短期決戦で講話を強いるのだとね。

だが、それではいけない。それは日本の都合でしかないのだよ。もし、アメリカと講話したいなら、リミットは3年なのだ。3年後に決戦を行い、勝利していなければならぬのだ……」

ふう、と息を整える。

「まあ、まだいくら時間はあるし、私の考えが最適解という訳ではないだろう。

我が独立特務実験艦隊は、作戦の第一段階において南方作戦に投入されるそうだ。くれぐれも、一番良い作戦を頼む。私も、最善の決断を心掛けるし、兵たちも応えてくれるだろう」

そこで言葉を切り、椅子から立ち上がる。

「期待しているよ、諸君」

そつ話を結んだ高木長官は、右手をすつと挙げて一同に敬礼を行う。その敬礼に、この場の全員が整然と敬礼を返す。

「さて、演習は明日からも続く、きちんと休むのも仕事のうちだよ」

そう言つて会議室を出て行こうとし、そうそう、と何かを思い出したように振り返る。

「この演習から帰ったら、君たちの着任を祝つて歓迎会を行うんだが、その席でやる自己紹介を兼ねた宴会芸を考えておきたまえ」

「「は?」「」

言うだけ言つて高木長官は会議室をあとにした。

またか……、という一同の生暖かい視線を注がれながら呆然とする
2人を残して。

つづく

第5話 3年の意味（後書き）

登場人物紹介

高木順一郎 中将

艦隊司令長官

色黒。

非常に謎の多い人物で、かなり顔が広い。

志摩大地 大尉

司令部付き副官

海兵63期卒

20代半ばだが老け顔。面長丸眼鏡で背は高め。

嫁にぞつこんラヴ（死語）の砲術屋。

高木長官にスカウトされてきた。

作者

「まあ実際は水底に眠れ先生のところから拉致ってきたんだけどね」

あずさ

「水底に眠れ先生には感謝です」

美希

「ところで何で大地を出したの？」

作者

「本文にある通り、人材不足。正直、アイマス関連だけでは大尉以下があまりに足りない。」

あとは、丁度タイミングが良かったからだね。妻帯者というのも大きいが」

美希

「へー。ところで、ミキたちの紹介はナシ？」

作者

「いらんだる別に。本文で紹介しやすいし、容姿もアケマスから無印、L4U、SPにDSと引き継がれてきたイメージがあるし」

美希

「じゃあプロフィールは無印やSP・DSそのまま？」

作者

「ああ容姿や3サイズはな、だが年齢は不明という設定だ。Pは海兵40期という設定だが、アイドル達は……14歳で中佐はあり得ないし、とはいえリアルにすると千早が48歳になるから……冗談じゃない」

あずさ

「それはシャレになりませんね」

作者

「でしょう？」

美希

「……それでは、ご意見ご感想お待ちしております、なの」

第6話 顔合わせ その2

翌日 朝

空母『陸奥』 飛行甲板

プロデューサー

今、『陸奥』の飛行甲板を蹴って最後の直掩機が飛びたって行った。
機数は4個小隊16機、機種は『零戦三一型乙』だそうだ。

「確か、十の位が機体、一の位が発動機、甲乙丙が武装の改良を表
す……だったか？」

「あふう。そうだよー」

美希があくびをしながら答える。

……やる気あんのか？

まあ、それはともかくだ、飛行甲板見た時から予想はしていたが……

「エンジンカバーに三等身のノーズアートはともかく、尾翼にバス
トアップ絵つてのはやり過ぎだろ……」

上空を旋回する零戦の内4機に至っては明らかに制式色の明灰色で
はない色 それぞれ薄い、緑、青、紫、黒 で全体が塗られて
おり、それぞれ別の娘がこれでもかとはかりに描かれている。

「あんな変態どもに限って優秀だからホント始末に負えないわよ……
……」

後ろから声がかかる。

「あ、でこちゃん」

「凸って言うなっ!」

と、飛行服に身を包んだデコっパチ（仮称）がのたまう。

「で？ そいつは？ …………… ああそう。私は水瀬伊織少佐。飛行隊長よ、覚えておきなさい」

この高飛車なデコは少佐の分際で生意気な……。
ん？ ミナセ……だと？

まさか、“あの”水瀬の令嬢なのか!？

と、昇降機の方から誰かが駆け寄ってくるのが視界の端に見えた。

「うっうー！ 美希さん、おはようございまーす!」

「やよいー、おはようなの」

また随分ちっこいのが来たもんだ。

飛行服姿ということは陸奥航空隊の一員だろうが、身長大丈夫なんだろうか。

「あの……美希さん。そちらの方は？ …………… あ、新しいプロデューサーさんですか!？ よろしく願いしまーすっ!」

元気良く挨拶してくれた。そっちの凸よりよっぽど可愛げがある。

「ああ、こちらこそ宜しく頼む……、えつと……？」

「はわっ。もうしおくれましたっ、高槻やよい大尉、艦爆隊長ですっ！」

「そうか……。ところで、艦攻はどこだ？ 全力出撃訓練だから全機出すと聞いたんだが」

今、飛行甲板に並んでいるのは九九艦爆ばかりだし、チリンチリンと鐘を鳴らしてフル稼働するエレベーターが運んでくるのは少し翼の形に違和感がある零戦ばかり。

本当なら、魚雷という重量物を抱える都合上、一番後ろの滑走距離が長くとれる位置に並んでいる筈なのだが、そこには既に艦爆が並んでいる。

「ん？ 亜美の艦攻は下からだだよ？」

「下？ 『赤城』みたいに三段空母なのか？」

使いにくい・搭載機が減るという理由で改装されたと聞いたが。

「ちょっと違うかもです……。えーと、その……伊織ちゃん、はいタッチ！」

と、にこやかに凸とハイタッチする。

「タッチ……って、何？ 私に説明しろって言っの！？」

「うっ……、ダメですかぁ？ 私が説明するより伊織ちゃんの方が分かりやすくていいかなー、って思っんですけど……」

……この上目遣い、俺なら断れねえな。

「っ……。し、仕方ないわね。陸奥飛行隊の撃墜王 伊織ちゃんが説明してあげるわ!」

「最後の最後でさぶちゃんに抜かれたのに撃墜王って名乗るのはどうかってミキは思っな」

「うるさいわね! 部下に手柄たてさせるのも指揮官の勤めよ!」

こいつ、もう5機墜としてるのか。

「で? ……射出甲板の説明ね。」

射出甲板があるのは飛行甲板のすぐ下、上段格納庫の前部よ。艦首から突き出る感じで空気式カタパルトが2基あるわ。

普通なら精々一度に40機しか飛ばせない所を56機飛ばせるのはコレのお陰ね」

「ほう、それは凄いな。……じゃあ、何で他の空母には採用されていないんだ? 開放式格納庫とかそれとか、いろいろ便利だろうに」

そう何気無く問うてみると、3人の表情がサツと変わった。

「あんたバカ? 新兵器が使い物になるまで一体どれだけ手間と時間かかると思ってるの!？」

「時化の度に水浸しになったり射出時に脚折れて不時着したり大変だったんですよ!」

「それは現場の苦勞を知らないにも程があるって思うな。というか、両方とも今ある空母に設置するのは構造上ムリなの」

トリプルで怒られるハメになった。

「……すまん」

「まあ、その辺の欠陥はウチや大亜細亜造船の技術者が空技廠や艦本と協力して改修したから安心していいわ」

胸を張って自信たっぷり言い切る伊織。やっぱり水瀬財閥の関係者か。

「でも、建造中の大型空母……優良客船改造の2隻と、マル4計画の正規空母と水上機母艦改造のは開放式格納庫らしいの」

「水上機母艦？ ……ああ、大亜細亜造船に発注された艦隊型水上機母艦か。何故今更とは思ってたが、やっぱりそういうことか」

どうせ、建造途中で突然空母へ改装を命じる、なんていう露骨な民間いじめがあったりしたんだろうな。

「……んー？ でこちゃん、やよい、なんか呼ばれてない？」

美希の視線の先には、いつの間にか完全に発進準備の整った40機の艦上機と、手を振っている飛行士がいた。

「たーいちよー！ そろそろ発艦時間ですよー！？」

「中子、どう見てもまだ話は終わってないと思いますよ？」

もう一人の飛行士にたしなめられているように見える。

「はわっ、もうそんな時間ですか！？ 伊織ちゃん、早く行きましょー！」

「わかってるわよ！ …… あんた、今からこの陸奥飛行隊が一航戦や二航戦にも負けない精鋭だってことを見せてあげるんだから、しっかり目に焼き付けておきなさいよね！」

そう言い残して、既にプロペラを回していつでも飛び立てる状態の愛機へと走っていった。

「さ、プロデューサーさん、ミキ達も早く中に入るの。ここに居たらジャマだし、発艦体勢に入ったら風上に向けて全速力で走るから40kn(72km/h)くらいの風になって飛ばされちゃうの」

そう言ってそそくさと艦橋ぬつながらハッチに手をかけ、早く早くと手招きする美希に続いてハッチをくぐった。

つづく

第6話 顔合わせ その2（後書き）

作者

「お待たせ致しました。第6話です」

黄色い方

「ねー、兄（c）兄（c）、亜美の出番名前だけー？」

作者

「今回はな。残念ながら中子（名字募集）と右子（本名募集）に出版とられた形になるか？」

亜美

「むー。仕方ないから用語解説だけでもするね。

まず、『一航戦』つてのは第一航空戦隊の略で、大型空母『赤城』

『加賀』を中心とした戦隊で、司令官は南雲忠一中将だよ。

で、『二航戦』は、同じく正規空母『蒼龍』『飛龍』を中心として、山口多聞少将が指揮してる戦隊。

この2つは日本、いや世界でもサイキョーの空母部隊だったワケ。いわゆる南雲機動艦隊つてのは、これと五航戦をあわせたの言うんだよ

………こんなんで良い？」

作者

「良いと思うよ。ただ………」

亜美

「二航戦の説明が必要な人は1話か2話で引き返すよね、多分」

作者

「多分、な。」

「意見ご感想、突っ込みなどお待ちしております」

亜美

「おります！」

第7話 陸奥飛行隊

第1分艦隊 空母『陸奥』

「……それでは、始めてくれたまえ」

高木司令長官の命令で、発艦が始まる。

「了解なの、発艦開始！」

射出甲板に据えられた2基の圧搾空気式発艦促進装置から、バシユッバシユッという音と共に1機づつ艦攻が飛び出してゆき、後を追って零戦4機が飛行甲板を蹴る。

実際、こんな曲芸をすべての空母でさせる訳にもゆかず、また、たった16機を打ち出すために大量の気蓄器……それこそ小型艦なら艦の重量バランスを崩すほどの……を搭載する訳にもゆかず、空母用空気式カタパルトは『陸奥』にしか装備されなかった。

数十分後……、総勢56機の攻撃隊は編隊を組んで模擬目標その一、第2・3分艦隊のいる南へと消えていった。

『陸奥』 艦橋横の張り出し

プロデューサー

「……で、航空隊の練度はどんなもんなんだ、実際？」

と、俺と同じく手すりに身を預けて編隊を見送る美希に問う。

「んー。……ごく少数のA+以外は、殆どB+とB-、正直5航戦以下なの……」

「げ、“妾の子”以下か……」

竣工まもなく、訓練時間がとれていない為に半分戦力外扱いの5航戦以下とは……。覚悟はしていたがやはりそうか……。

「むーっ、よくもわがえーこーの陸奥空をバカにしたなっ！」

とうっ、というかけ声と共に、上の見張り所から目の前になにかが降ってきた。

「その為のロッテ戦術だし、練度こーじょーの為に教導隊の兄（c）達も頑張ってるんだよ！」

降ってきたサイドテールの娘が直掩機を指差して詰めよってくる。

「プロデューサーさん、それは無神経なの。ミキでもカンジ悪いって思っな。でも、真美もちよつと失礼じゃない？ 一応少将さんだよ？」

一応とはなんだ一応とは。それでも海兵40期では上の方だぞ？

「しつれーいたしましたっ！ じぶん、双海真美大尉、艦攻乗りでありますっ」

ビシッ、と敬礼してみせる真美。口調に若干含みがある。

「いや、こちらこそ軽率だった」

とりあえず答礼しつつ謝っておく、そういえば美希もパイロットだった訳だし。

「……ところで、“ロツテ”ってなんだ？ 千葉か？」

「千葉？ 何ソレ。……ロツテってのは常に2機一組で相互支援しつつ空戦を行う戦法なの。」

ちなみに、ロツテを2つでシュヴァルムっていうの。
うちではB+とB-の搭乗員を組み合わせたロツテ2つ……シュヴァルムを小隊として、いくつかの小隊を適宜A+の教導隊員に率いさせてるの」

「ほお。確かに今までの3機編隊よりは簡単そうだな。……ちなみにそれは美希オリジナルなのか？」

「ううん、ドイツの駐在武官さんに聞いたの。陸軍さんも導入するらしいって」陸軍さんがね……まあ構わんが、どうも陸軍と聞くとねえ……。

「あっ！」

なにかを思い出したように美希のアホ毛がピンと立った。

「真美、試験飛行の準備は出来てるの？」

「えー、あれは午後からだからいいでしょー？」

……何の話か気になるところだが、律子の中から呼んでいるのが見えただけでこちらへ向かった。

2時間後

「対空戦闘用意！」

さて、いよいよ本日のメインイベント、艦隊防空訓練が始まる。と言っても、模擬攻撃に対空火器の照準を合わせ、撃たれたつもりで回避運動するだけ、ではあるが。

「撃ち方始めえ！」

機銃座や高角砲が旋回し、“敵機”を阻止すべく照準を合わせる。

「艦爆、軽巡『梓』に向かいます！」

8機の艦爆が一行になつて『梓』に襲い掛かる。高空からそのまま急降下してゆき……引き起こした。

「『梓』被弾！」

ご丁寧に発煙筒か煙幕か焚いて、今まで見事にこちらに合わせ航行していたのが、まるで本当に被弾したかのようによたよた離脱してゆく。

あずささんの操艦が見事なのか、艦の練度が高いのか。両方だろう。

「右舷より雷撃！」

「取舵いっばあーい！」

舞さんが必死に舵輪を回す。

艦攻16機が前方を通り過ぎてゆく。

……………待てよ、残りの艦爆はどうした？

「直上オー、急降下アー！」

あーあ…………。

沈みはしないだろうが、空母としては沈んだも同じだな…………。

暫くして

訓練を終えた艦攻と艦爆が次々と降りてくる。

「……………これ、行きは良いが帰りはどうするんだ？ 全部降ろせるのか？」

艦爆と艦攻あわせて40機、もうこれ以上甲板には降りるスペースが無い。

「無理なの。直掩零戦16機＋護衛零戦16機＋九九艦爆24機＋九七艦攻2号16機の合計72機を降ろせる母艦なんて何処にも無いの」

さらりと言ったのける。

「……！　じゃあ……」

「そう、まず実戦では使えない、使う状況になっちゃいけない戦法なの」

そう、こんな無茶苦茶ができるのは、今回のように敵艦隊が近い……2回に分けて収容できる時、近くに別の飛行場がある時、あとは……。

「搭載機が半減しても構わない時、か」

不時着なり、未帰還なりで。

「そう、でも、まともな直掩機がいる機動艦隊に攻撃したら……多分16機くらいはすぐに……」

やられる……帰還できない、あるいは着艦できない、か。

……ちよつと話題変えるか。

「ところで、『梓』は何時まであもよたよたしてるんだ？　今日の演習はもう終わりだろ？」

そう言うと、海図に目を落としていた律子が振り返ってすつとんきような声をあげる。

「あれ？　言ってませんでした？　昨日からずっと……後1時間弱は対潜水艦訓練中だって」

聞いてないぞ……って！

「……潜水艦にしたら今がラストチャンスじゃないか？」

発着艦作業中は一定の速度で走るし、舵も切れない。

「この速度では追いつけないだろうが、もし、待ち伏……」

「左舷より雷跡4！ 回避不能！」

つづく

第7話 陸奥飛行隊（後書き）

作者

「……それではご意見ご感想お待ちし……………」

亜美

「ちょっと兄（c）！ 亜美の出番は!？」

作者

「（のワの）」

亜美

「こつち見てよ!！」

美希

「『亜美は不憫』ってカンジ？」

亜美

「ミキミキひどいつ！ 出番分けてよっ！」

作者

「わかった、前向きに善処するから……。あと、これは美希に限らないけど、暫くしたら『陸奥』からPが動くから出番減るよ」

美希

「なのっ!？」

亜美

「やった ご意見ご感想いつでもお待ちしてるよ、兄（c）姉（c）」

c
r

第8話 液冷機の羽ばたき（改二）（前書き）

改定箇所

登場飛行機の変更

少々加筆

第8話 液冷機の羽ばたき（改二）

昼過ぎ

空母『陸奥』 飛行甲板

先程の醜態 航空攻撃を『陸奥』中破『梓』小破で乗りきったにも関わらず、最後に潜水艦からの雷撃を喰ってしまった で沈んだ雰囲気を変えてくれそうな澄みきった空に、零戦4機が旋回している。

甲板上では、1機の単発機が暖気運転を行っている。

『十三試艦上爆撃機』

現在海軍の主力を勤めている九九式艦爆の後継機として設計されている機体だ。

この飛行機の特徴は、なんと言っても日本機には珍しい液冷発動機を使っていることだろう。海軍航空廠で設計され、液冷発動機に定評のある水瀬発動機と有名艦爆・水上機メーカーの愛知時計電機がタッグを組んで生産した高性能艦爆……という触れ込みである。

今、甲板上で暖気運転を行っているのは試作6号機で、その高速性能に目を着けた海軍が偵察機として転用し、実戦部隊での試験に回した4機の中の1機である。

『陸奥』 艦橋前

プロデューサー

「発進準備、まもなく完了します！」

「わかったの。そのまま続けて」

甲板員の報告に落ち着き払った様子で答える。

美希は特に飛行試験に不安を感じていないようだ。それだけ自信があるのだろう。だが……

「しかし、本当にこんな性能が出せるのですか？ 星井中佐」

実際、志摩大尉の懸念も最もだと思う。

液冷発動機は未だ我が国の生産技術では量産が難しく、不調を起こしやすいと聞くからだ。

ところが、その一言で美希の表情が不満のそれへと変わる。

「……それは心外なの。わざわざでこちゃんとこまで行って整備講習受けさせたんだよ？ ウチの整備員は液冷発動機の整備も完璧なの。新人さん2人は黙って見て欲しいな」

言いながらメインマストの信号桁を見る……現在第五戦速。合成風速は35ktを越える。

「発艦始め！」

最後まで機体にとりついていていた整備員が待避し、遮風柵が倒されて真美の乗る十三試艦爆が滑走を始める。

「「おお……」」

甲板の半分を使って滑走した後、十三試艦爆は飛行甲板を蹴った。そのまま上昇していき、ある程度高度を取ると零戦に瞬く間に追い付いた。あわてて振り切ろうとするが、抜かされてしまう。

「戦闘機より速い……」

この性能なら偵察機としては勿論、爆撃機としても十分使えそうだ。

「どう？ 不具合起こしてるように見える？ ラブラブさん」

美希がしたり顔で言う。実際に見せられては反論のしようがない。ちよつと悔しいが今回は俺たちの負けだ。それに志摩大尉など、別の意味でも敗北している。

「すいません私が悪かったです。あとお願いですからそれはやめてくださいお願いします……」

顔を赤らめながら頼みこむ志摩大尉。

彼にこんなあだ名がついたのは、昨日の夜、律子に「呼び捨てで良いわ」と言われた志摩大尉が「あの……呼び捨ては、妻だけと、決めて、おります、ので……その」と、顔を真っ赤にしながら嫁溺愛宣言をかましたからなのだ。

まあ、面白いのでほうっておく。

「あら、なかなかいい感じに飛んでるじゃない」

「律っちゃん信じてなかったの？」

「そついうワケではないんだけどねえ……」

艦橋から律子と真美が出てきた。

……… ちょっと待って星井。あの飛行機を飛ばしているのは誰か？ 真美だ。じゃあ目の前にいる真美は？

姉妹……… は考えにくい、そういう人事……… 同じ艦に肉親を乗せることは原則無い。

じゃあアレだ、ドッペルゲンゲルってやつか、世の中には生き写しが3人いるってやつ。

……… まてまて落ち着け俺、それは無いだろ。……… 推理小説とかなら既にヒントがあったハズだ。

……… そうだ、武田先輩のファイル、完璧に忘れてた。

……… えー、航空隊は、……… 沿革……… 『鳳翔』……… 空地分離……… 漢口進出……… じゃなくて、名簿、歴代隊長のは……… これか。

双海、双海……… と、あった。艦攻隊長の双海……… 亜美？ 確か真美が艦攻では？ …… いた。

なるほど、真美は艦攻から艦偵に乗り換えてるのか。で、ややこしいが艦偵隊にも艦攻はある、と。

つまり亜美と真美の双子、ということか。……… まず、女子飛行兵の配属先はここしか無いよな。うん。

「プロデューサー、こちらにいらしたんですか」

律子がこちらに気づいたようだ。

「ああ。探させたか？ …… そいつは？」

「そいつって……… 双海大尉ですよ。もうお会いになったでしょう？」

何をいうのか、という表情を作ってみせる。が、目が面白がってるぞ、律っちゃん？

「いや、真美には会ったがそいつはまだだな」

そう言うと、2人は顔を見合わせる。

「……騙されなかったわね」

「外からきた人、絶対ダメされるのにね」

ひどい奴らだな。というか直属の上官をおちよくるなよ。

「兄（c）鋭いね。あ、亜美は双海亜美、艦攻隊長だよ。

気づいてると思うけど、真美とは双子の姉妹で、見分けかたは髪留めの位置、飛行服のマフラーの巻き方、制帽の傾きが逆で、髪留めとマフラーの色が違うことだよ。

ちなみに専門は雷撃だよ。真美は偵察飛行がメインだからそこも違うね」

なるほど。しかし瓜二つとはこの事か、というほど似ている。今聞いた特徴なんか入れ替えたらわからなくなるものばかりだしな……。黒子なんかないかなと探していると、律子が何か思い出したようだ。

「そうそう、高木長官が話があるそうです」

「ん、わかった。すぐ行く」

長官私室

「プロデューサー、入ります！」

何故かここでも参謀長ではなく、プロデューサーなのだが、何故かそれが自分でも自然に思えてしまう。不思議だ。

「入りましたえ」

高木長官は書類仕事に追われているらしく、机の上に置かれた書類に目を落としたまま、俺を招き入れた。

「悪いね、急に呼び立てて」

書類を脇にどけて顔をあげる。

「いえ」

「実は君に渡したい物があつてね」

そこで俺が渡されたのは、『演習終了時迄開封ヲ禁ズ』と大書された極秘スタンプ付きの封筒と……

「演習最終日の水上戦闘演習に2分艦側で参加……ですか？」

翌々日の演習に襲撃側で参加せよとお達しだった

う
う
う
う

第8話 液冷機の羽ばたき（改二）（後書き）

美希

「……………」

作者

「重ね重ね申し訳ございません」

美希（ゆっくり声）

「バ力なの？ 死ぬの？」

作者

「はい……………」

少し離れた所

響

（なんかでづらいぞ…………）

雪歩

（ほら真ちゃん、頑張って！）

真

「えー、こんな駄作ですが、今後ともどうぞよろしくお願いします。
次回はボクたちも出ますよ！」

第9話 顔合わせ その3

翌々日

第2分艦隊 打撃艦『多良』艦長公室

第2分艦隊旗艦『多良』の艦長室、1分艦に対する襲撃訓練の詰めという名目 実際は顔合わせ で分艦隊幹部が集まっていた。今いるのは、分艦隊司令官の音無小鳥少将、水雷戦隊司令の我那覇響大佐、『由布』艦長の萩原雪歩大佐の3人で、まだ来ていない2人を待ちながら話に花を咲かせている。

「2人とも遅いわね」

小鳥が壁に掛かった時計を見る。時間まではまだ少しあるとはいえ、部屋の主も居ないのはおかしいと言える。

「真ならさつき艦橋で副長と話しこんでたぞ。……お、雪歩、今日のはまた一味違うな」

「あ、わかった？ 今日ちょっと冒険してみたんだ」

この2人はあまり気にしていないようで、それよりお茶の方に話の重心が移っている。

と、その時小鳥はドアの外に何者かの気配を感じた。

打撃艦『多良』艦内通路

プロデューサー

今、俺は“高速打撃艦”とやらの艦内を案内の少尉について歩いているのだが……、まあ普通だな。意外と。

イメージとしては外洋モニター艦だと聞いたから、てっきりエレバス級モニター艦のような奇形かと思っただらそうでもなく、むしろポケット戦艦に近い艦型だし、民間の……大亜細亜造船で建造されたためか、任務に後方攪乱も含まれるからか、居住性も良さそうだ。

さて、実は、初日に会った皆さんと違って、さつき艦橋で挨拶した女顔の『多良』艦長以外の2分艦幹部とは面識がある。

中でも雪歩とは同じ砲術屋の縁で何度も話したことがある。彼女は一見すると気弱で人付き合い　特に男性との　を苦手とするが、その実なかなか芯がつよく好感の持てる性格だ。ただ、ある一線を越えると、本人曰く「自分が自分じゃなくなる」らしいので注意、と。

次、我那覇響。名字でわかる通り沖縄の出で、その事でごちゃごちゃ言う輩もいるようだ。まあ、ここには琉球・台湾出身の者も多にいる（と言うよりわざと集めた）と聞くと、そんなことは少ないだろう。専門は水雷で、わりと突撃バカ……もとい、勇猛果敢な指揮官との評判だ。

最後に、音無小鳥。……なんと言うか、優秀ではあるのだが、いかんせん……

「……あの、艦長室はこちらですが……」

ふと顔をあげると、案内の少尉が所在なさげにこちらを見ている。

いかんいかん、考え事に夢中になって目的地についたのにも気付かなかったらしい。

「おお、ありがとう。助かったよ」

「いえ、……それでは失礼します」

目礼して言葉少なに立ち去っていく。

さて、ずいぶんご無沙汰だが元気にしていただろうか、と考えながらドアをノックしようとした時、いきなり後ろから話しかけられた。

「あれ、プロデューサー？　もしかしてボク追い付いちゃいましたか？」

それとも待つていて頂けたんですか、といいながら回り込んでくる菊地……なんだっけ。とにかく菊地大佐。先ほど艦橋で、先に行つていて欲しいと言つていたのに、もう追い付いてきたらしい。足の速い奴だ。

「ああ……いや、そういう訳ではないが……」

さて、ここで一つ問題がある。それは、

こいつ、男？　それとも女？

確かに、名前を見た時は男だと思ったが、石川さんは“実”一字で“みのり”って読むし、“千早”もどちらかといえば男の名前だ（普通は名字）。

さて、どうするか……。直接聞くのは失礼だし、雪歩の反応を見るのも手だが、親しければあんまり変わらんからな……。

「……どうかしましたか？ 入りますよ？」

いかん、まただ。この癖はどうにかしないとな。

そんなことを考えていると、菊地大佐に手を掴まれてそのままドアの内側へと引っ張りこまれてしまった。

「お待たせー！ 紹介するよ、新任のプロd」

「おー、久っしぶりだな！ 自分のこと覚えてたか？」

「お久しぶりですう。今、お茶淹れますね」

引っ張りこまれた先では見知った3人が迎えてくれた。

「もちろん覚えていたさ響。雪歩、いつもありがとうな。2人とも元気そうで何よりだよ」

本当にかわりなく元気そうだ。

「……あのー」

さつきから驚いた顔のまま固まっていた菊地大佐がおずおずと声をあげる。

「もしかして、みんな顔見知り？ ボク以外」

「あれ？ プロデューサーと面識無いの真ちゃんだけだって言わなかった？」

「……………そういえば聞いてたかも……………」

軽く落ち込む真。

そのの背中をポンポンと叩きながら、小鳥さんがちよつと拗ねた声を出す。

「もう、私はスルーですか？」

出たなびよ助。彼女を評して、「天は二物を与えない……………与えた場合はどこかでバランスをとるのよ」とは良く言ったものだ。

「……………ともあれ、Idol Fleet 第2分艦隊へようこそ。一同、歓迎致します」

小鳥さんと共に、響、雪歩、真がサツと敬礼する。

「かたじけない」

俺も答礼を返し、手を下げさせる。

「さて……………とりあえず、」

この場の最高指揮官である小鳥さんが話しはじめる。
早速本題に入るのかな？

「お茶の続きをしましょうか」

「……………おいびよ助」

期待した俺がアホみたいじゃないか。

「何ですかプロデューサーさん。お茶菓子もありますよ?」

「わあい……じゃなくて!」

「……案外プロデューサーって面白い人だね。見た目と違って」

「真もそう思うか? 自分も最初はな……」

ああもつ、2人ともにやにやするな響も余計なこと言うな……。

「はいどうぞ。プロデューサー」

頭を抱える俺に、雪歩が湯呑みを差し出してくれる。本当に雪歩はかわいいなあ。

なし崩しにお茶会突入

そして完全に雑談タイム

「……それでさあ、それ以来会う度に自分のこと詐胸詐胸言ってるんだぞ」

あの百貫デブが。と、真相手に気炎をあげる響。なんか、すごくその人物に心当たりがあるが、そんなことより今は目の前の最後の玉羊羹の行方の方が大事だ。

「……………」

俺と小鳥さん。その間にはただ一つ残された玉羊羹。
この勝負、先に気を抜いた方の負けだ。

「響、あの人は上官なんだからさあ、その呼び方は不味いんじゃない？」
……」

「真だつてさあ、男女とか言われてただろ？ 腹立たないのか？」

「えー、でも、あの後『妻子がいなければ、抱きたいくらいにいい女だと思っている！』『多少ボーイッシュな所はあるけど、それこそが君の魅力だと私は考えている。むしろ、その分可愛さも引き立つと言うかな……』って」

「完璧に誤魔化されちゃって……。絶対、心の中でほくそえんでるんだぞ……………」

「まあまあ、2人とも落ち着いて、ね？」

雪歩が宥めに入ったようだ。

しかし、なかなか小鳥さんも手強く、なかなかスキを見せてくれない。

「プロデューサーさん、この場の最高指揮官は私ですよ？」

「アホめかせ。俺のが先任だろう」

この辺少々ややこしいのだが、参謀は指揮官の補佐が仕事で、基本的に艦隊指揮はしないのだ。……なんか不毛な争いな気がしてきた。

と、2人を宿めた雪歩がこちらに来る。

「音無さん聞いて下さいよー。2人とも子供みたいな言い争いして……、あ、余ってるなら頂きますね」

そう言うと、おもむろに目の前の懸案事項につまようじを突き刺し、口に運んだ。

「「あつ……」」

「……？ どうかしました？」

なんだこの状況……これぞまさに、

「漁夫の利、ですね」

「だな……」

2人してがつくりとうなだれる。

今までのにらみ合いはいつたいなんだっただ……。

「なあプロデューサー。そろそろ本題に入った方が良いと思うぞ？」

「そうですね、今回の演習はどんな状況なんですか？」

さっきまで言い争いしてた響と真がもう立ち直っている。切り替えの早いことで。

こちららも気を取り直していくとしよう。

「それについては……これを見てくれ」

想定状況

本海域に來襲した空母を中心とする小規模な敵任務部隊は、在泊艦艇及び基地施設に攻撃を加えた後、逃走中である。

既に、我が方の航空攻撃により損傷を負わせたものの、戦果は不十分である。

IF（独立艦隊）2分艦は、逃走する敵任務部隊を追跡、捕捉し撃滅せよ。

最優先目標は空母とし、巡洋艦、駆逐艦の撃沈は副次目標とする。なお、打撃艦の喪失は認めない。

彼我戦力

・第2分艦隊 音無少将

打撃戦隊 菊地大佐

打撃艦『多良』『由布』（小破）

水雷戦隊 我那覇大佐

軽巡『夕張』

第1駆逐隊 第2駆逐隊（2隻出撃不能）

計、打撃艦2、軽巡1、駆逐艦6

・敵任務部隊

空母 25番通爆3発、航空魚雷1本命中
甲板中破発艦不能、出し得る速力20k t程度と認む

巡洋艦 25番通爆2発命中
小破ないし中破と認む

計、空母1、巡洋艦1、駆逐艦4

以上

「どう思う？」

「……すぐ、ノルウェー沖海戦です……」

「去年の英空母『グローリアス』VS独巡戦『シャルンホルスト』
『グナイゼナウ』のやつね。ナルヴィクからの撤退を支援中の英艦
隊を独艦隊が捕捉、殲滅した」

真の呟きを小鳥さんが補足する。

「私と真ちゃんの統制射撃でアウトレンジ出来れば最高なんだけど
……」

「絶対、防空戦隊が阻止しに出てくるよね」

真と雪歩が顔を見合せて頷きあう。

「自分の水雷戦隊も忘れないで欲しいんだぞ。それを排除する為に

自分たちがいるんだからな！……不安があるとしたら雷撃型駆逐艦が半分に減ってることくらいだぞ」

胸を張って響がその心配に答える。本物かな、あれ。

水雷戦隊の駆逐艦は、初春級程度の艦体に、14センチ単装砲3基、8・8cm連装高角砲2基を積んだ『霞』型、四連装魚雷発射管3基と8・8cm連装高角砲1基を積んだ『月』型の2種類で編成されている。

ちなみに、実際使ってみると使いづらいことがわかったので、後継艦の建造が進んでいるそうだ。……何故作る前に気付かなかったのか、大いに疑問だが。

「さて、まあ相手が誰であれ、全力を尽くすのが私たちの仕事よ。プロデューサーさんも、私たちの戦い方を見て、最適な作戦をたてて下さいね」

「解った。じっくり見せてもらおうよ」

高木長官が俺をこちらに参加させたのはこういう意図でなんだろう。武田先輩の言う通り癖の強い人と艦だが、見事使いこなして見せようじゃないか。

「それでは、今演習の完全勝利を目指して……」

「……えい、えい、おー！！」

同時刻、第1分艦隊

「あら、向こうはもう勝った気にいるようね」

「では、艦隊戦を教育して差し上げるの」

「私の『陸奥』に常識が通用すると思ったら大間違いよ」

「私がいる限り、空母には指一本触れさせない！」

つづく

第9話 顔合わせ その3（後書き）

作者

「お待たせしました。響登場です！」

真

「ボクたちもでしょう!？」

雪歩

「こんなダメダメな私は、穴掘って埋まっていますぅ〜!」

響

「誰もそんなこと言ってないぞ! ところで、次回はいいいよ演習か？」

作者

「ええ。ピヨ助の妄想が炸裂します」

小鳥

「ピヨッ!？」

雪歩（穴の中）

「それでは、ご意見ご感想お待ちしておりますぅ」

第10話 演習1941（1）（前書き）

演習時は、可能な限り実戦と同じように行動せねばならない。

その為に、必ず射撃開始時には演習弾または空砲を撃つこと。

被弾判定が出ればその被害にみあった行動をとり、戦死判定を受ければその場で死んだフリをし、以後演習終了まで隅っこで黙ってじっとしていること。

演習が終了したら、各艦隊指揮官は演習の模様を主観的にまとめ、それを資料として感想戦をすみやかに行うこと

独立特務実験艦隊 演習の手引きより抜粋

第10話 演習1941(1)

1941年11月6日

演習海域

第2分艦隊

分艦隊旗艦『多良』

戦闘配置についた打撃艦の艦橋は緊張感がみなぎっていた。司令官をはじめとして、艦長も幕僚もみな真っ白の第二種軍装を纏っている。

「水観より入電！ 敵艦隊、進路陣形速力変ワラズ。巡洋艦、水観を射出。我、触接を継続ス」

通信兵が観測機からの報告を読み上げる。
敵艦隊は依然、空母を中心とした輪形陣のまま、速力18ktで西に向かっていている。

「……頃合いね。艦隊全艦へ打電。全艦最大戦速。水雷戦隊は突撃開始よ。私達は2万5千で射撃開始」

容姿端麗頭脳明晰才色兼備と評判の音無小鳥分艦隊司令官の命令がとぶ。

「了解！ 最大戦速！ 総員水上打撃戦よーい！ 砲術長、統制射

撃戦装置作動、目標選定『由布』に委任！」

菊地真大佐が命を下したあと、雪歩ならやってくれるさ、と、小さく呟く。

何しろ、今この艦に続航する『由布』艦長である彼女は、以前の演習にて、距離32000mで命中率12%を叩き出した逸材である。邪魔が入らなければ、傷ついた空母如き沈められないはずがない。

「水雷戦隊、離れまあす！」

外を見ていた見張りが叫ぶ。

打撃艦の前方を進んでいた水雷戦隊が更に速力をあげ、突進を開始したのだ。

水雷戦隊旗艦『夕張』

水雷戦隊は打撃艦の前方5000mを、第1駆逐隊、『夕張』、第2駆逐隊の順に単縦陣を組んで航行していた。

「敵艦隊見ゆ、12時方向、距離2万7千！」

「『多良』より入電！『突撃セヨ』です！」

「よし、1駆戦へ、敵駆逐艦隊を排除せよ、以後の行動を隊司令に委任。」

本艦と2駆戦は統制魚雷戦よーい！ 各艦最大戦速！ 突撃せよ。繰り返す、突撃せよ！」

見張りや通信員の声に、水雷戦隊司令官、我那覇響大佐が、剣帯の短剣の横に帯びた釵サイを抜き放ち、敵艦隊を指して命じる。

彼女の脳内にある作戦はこうだ。

まず、1 駆戦の有する14cm砲12門、88mm砲16門の火力で護衛の駆逐艦を排除。その後、『夕張』と2 駆戦が突入し、魚雷28本を手負いの巡洋艦か空母に叩きつける。敵が艦上機を使えない今、どう転んでも勝利は間違いないのだから。

……責めるのは酷かも知れないが、それは完全に油断だった。

「敵駆逐艦、煙幕展開！ 分離して向かって来ます！」

分艦隊旗艦『多良』

「……煙幕？ ……早すぎる」

煙幕は敵のみならず、味方の視界も妨げる。あんなバラバラに走りながら展開したら危険だ。

一体何を企んでいる……。菊地大佐が顎に手をあてて考えこむ。

「そうだ、水観は？ 連絡はないのか？」

傍らの通信兵に問いかけるも通信兵の表情は芳しくない。

「それが……、『ワレ、テキカ……』との通信を最後に応答がありません……」

ふむ、と音無司令官が呟く。

「……墜とされようね。観測機かしら？」

「多分……。『我、敵観測機の攻撃を受く』が、途中で途切れたんでしょうね……」

菊地艦長も眉間にシワを寄せて応じた。観測機が使えないということとは、最も安全な遠距離砲撃戦が封じられたことを意味するからだ。

「『由布』の観測機を上げさせるのは……」

「無理ね。墜とされるのがオチよ」

こちらの艦載機は両艦あわせて『愛知10試水上観測機改』と『愛知12試三座水上偵察機』が2機づつの合計4機。

水観は競作に敗れたものを改良した機、水偵は正式採用前の増加試作機だが、それぞれ零観や零式水偵とそう変わらない性能である。とはいえ、相手も同じものを持っている以上それに意味は無いのだが。

「仕方ありませんね。先程の命令は撤回。1万8千まで引き付けてから射撃開始。副砲は射程に入り次第自由射撃。水雷戦隊には敵駆逐艦の排除を重ねて命令しておいて」

音無司令官が命令を修正するのを聞きながら、プロデューサーが額を軽く叩いて俯く。

「如何されましたか？」

傍らにいた艦長付の少尉が問いかける。

「いや、な……」

どうも嫌な予感が、という続きは飲み込んで言葉を濁す。

しかし、彼の予感はすぐに現実のものとなる。

水雷戦隊旗艦『夕張』

「駆逐艦隊を排除せよ！？ 言われなくてもやってるさ！」

「1 駆戦左回頭！ 同航砲戦に入ります！」

舵を握っていた我那覇大佐が不機嫌そうに顔をしかめ、舵輪を指で叩く。

艦橋からは、斜陣で航行する敵駆逐隊と同航砲戦に入った1 駆戦が全砲門から発砲炎を煌めかせているのがよく見え、双方の周りには“水柱が立ち始めた”。

その時。

「駆逐艦『朝靄』被弾、炎上ッ！ さらに『夕靄』爆沈ッ！」

通信兵の絶叫が艦橋にこだまする。

1 駆戦の先頭艦（朝靄）は“燃え盛り”、2 番艦（夕靄）は“真つ二つに折れて”しまっている。

「ぬー！？ ゆ、誘爆でもしたのか！？」

驚くのも無理は無い。

敵の101型駆逐艦の片舷投射力は88mm砲6門。対して1駆戦朝靄型は14cm砲3門と88mm4門で、隻数も同じく4隻とほぼ互角。さらに敵は煙幕を張っているのと、こちらは斜陣の頭を抑え気味に機動していることを考えれば、こんなに早く2隻が仕留められるとは考えにくい。

……駆逐艦4隻対4隻ならば。

「…………観測機…………？」

先程から上空を舞っている水観にふと目をとめる我那覇大佐。

「…………そうだ、わかったんだぞ！ あの早すぎる煙幕は巡洋艦を隠すためか！」

もし、もっと早く観測機の意味に気づいていたら。或いは、この時低空から忍び寄る別の機影に気づいていたら。

また結果は変わっていただろう。

「前方、煙幕の影から機影ッ！」

見張りが叫んだ時にはもう遅すぎた。

??????

「敵水雷戦隊目視、まだ気づいてないよ」

「無理もないの。フツー甲板中破したら空母は終わり。それが“常識”なの。それより……」

「わかってるよ。狙いはただひとつ」

「「戦隊旗艦の艦橋」」

「じゃあ左に避けるから、旋回機銃はヨロシクね」

「任せろなの」

つづく

第10話 演習1941（1）（後書き）

作者

「……我ながら変な描写だなあ。演習なのに実弾ぶっぱなしたり、目の前で起こったことを通信兵が絶叫したり」

少尉

「まあ、常識的にはそうですね。あ、申し遅れました。前話から登場のモブ少尉です。ちなみに素直クール系美少女です。どうぞヨロシク」

作者

「自分で言うか？ それ」

少尉

「素直ですから。ちなみに、“ぬー”ってのは、標準語で言つと何だ”って意味です」

ご意見ご感想お待ちしております

第11話 演習1941(2)

水雷戦隊旗艦『夕張』

「前方、煙幕の影より機影ッ！」

見張り員が叫ぶ。ガラスが外されて吹きさらしの艦橋でも、まっすぐこちらに向かつてくる艦上機が見えた。

「何ばやばやしてるさッ、機銃撃てッ！」

そう叫びながら舵輪をまわす我那覇大佐。

「やった！ 命中！」

艦橋そばの13mm連装機銃が射撃を開始したかと思うと、どうやら搭乗員に命中したらしくそのままふらふらと右へ流されてゆく。

助かった……。そんな空気がその場を支配した。

その時……。恐らく、最期の力を振り絞ってだろう。敵機の後部旋回機銃が火を吹いた。

「んな！？」

それが、我那覇大佐の最後の言葉となった。

そのまま、彼女の体は舵輪にもたれ掛かるように崩れ落ちた。

『夕張』が一所をぐるぐる回り出した時、銃撃を行った敵機もまた、

“力尽きて海面に激突” “炎上した”。

分艦隊旗艦『多良』

「水雷戦隊司令官戦死ッ！ 同戦隊、混乱している模様！」

通信兵の報告が艦橋に響きわたる。

「響が！？ どうして!？」

「まさか、艦載機！？ でも、甲板は中破、艦載機の発進は出来ない筈……」

狼狽する2人をよそに、プロデューサーが静かに言った。手元には件のファイル。

「……カタパルト。カタパルトだ。零式複座艦偵も射出できる」
「そんな……」

艦橋に詰めていたメンバーが皆驚きの表情を見せるなか、艦長付少尉の、カンニング乙、という呟きは華麗に黙殺された。

「砲術より艦長、司令官。間もなく駆逐艦を目標に射撃開始します。なお『由布』からは次弾より目標直前で炸裂するよう信管を調定せよとも言ってきております」

スピーカーから砲術長の声が確認をとる。

現在、砲術の指揮をとっているのは『由布』であり、その艦長である萩原雪歩大佐なのだが、一応それを司令官に伝えた訳だ。

「先に駆逐艦を始末するのね。問題ないわ。

艦長、雷撃に注意しつつ可能な限り寄せて頂戴」

「了解、敵駆逐艦主砲の最大射程1万3千まで舵そのまま」

「よーそろー」

その時、丁度『由布』が駆逐艦隊へ初弾を発砲。『多良』もそれに続いた。

打撃艦『由布』

「3……2……1、着弾、今！」

「命中！ 敵2・3番艦沈みまあす！」

同航砲戦に入って交互撃ち方で十数射、やっとのことで命中弾を得た。

狙っていた2番艦と巻き添えを喰った3番艦が落伍してゆく。

「これだけ撃ってやっととは……皆さん弛んでますう」

萩原艦長としてはこの命中率が気に入らないようで、大体この距離で挟みまで何発撃ってるんですか、と不満たらたらである。

「しかし艦長、こればかりは判定官の「航海長？」……もとい、神の振る舞の目次第ですから」

砲員の責任ではないと言外に仄めかす航海長に、何が気に障ったのか怖い目付きになる艦長。艦橋にひんやりとした空気が流れる。

それを打ち破るように怒涛の勢いで報告が舞い込む。

「副砲弾、敵1番艦に命中！ 行き足落ちまあす！」 「煙幕薄まりま…… 敵甲巡発見！ 距離1万8千…… さらに後方…… なっ！？」

見張りの言葉が途切れる。

「なんですか。報告は最後まで…… えっ！？」

煙幕の向こうから姿を現したのは、巨大なつぺりとした艦影…… 航空母艦『陸奥』だった。

「何故…… 何故逃げていないの！？」

敵艦隊の常識はずれな行動に驚きを隠せない艦橋要員。そこに追い討ちをかけるように悲報が舞い込む。

「通信より艦橋！ 旗艦より入電。…… 『我、艦橋二被弾、司令官・艦長戦死、幕僚全滅。戦闘不能、指揮権ヲ委譲シ離脱ス。貴艦ノ武運長久ヲ祈ル』…… 以上です……」

少し前

分艦隊旗艦『多良』

「煙幕、晴れまあす…… 敵巡洋艦発見！ 距離2万弱！」

見張りから巡洋艦発見との報告が入る。

「……なるほど、そういうカラクリか……待てよ？」

プロデューサーが呟くのを他所に菊地艦長が矢継ぎ早に命令を下す。

「砲術！ 予備命令、次弾より砲撃目標巡洋艦！」

通信！ 『由布』に対して、巡洋艦発見、砲撃目標変更を具申す。
と！」

これは、砲撃目標を『由布』に委任している為に予備命令という形になったのだ。

……しかし、この二つの命令が実行に移されることはついぞなかった。

この直後、敵巡洋艦から放たれた15センチ砲弾が『多良』の艦橋を掠め、そこにいた者達全員の命を刈り取って……………

「なあピヨ助、この戦記風報告書に何の意味があるんだ？」

「まあまあ、そう言わないでくださいよプロデューサー」

「高木長官には深あーい深慮がありなんですよ。多分」

人気のあまり無い士官食堂で、報告書のまとめをしていた小鳥と真、そして通りすがりを捕まったプロデューサーの3人が話している。既に演習終了から2日、艦隊のほとんどは母港下田に艦体を休めていた。

「ところで、一つ質問があるんだが、良いか？」

「ボクに答えられる範囲なら。何でもどうぞ」

書類から目をあげてプロデューサーに向き直る真。

「なんと言つか、正直死にすぎだろ？ 何回『艦長戦死判定！』って聞いたかわからんぞ」

ちなみに、各艦の艦長で生き残ったのは『由布』の雪歩のみで、千早と舞の二人もあの後41サンチ砲の直射を乗艦に喰らい戦死判定を受けている。

「それは判定表のせいとしか……。あと、時間短縮のために命中率がかなり高く設定されてるし、あれだけ沈めばそりゃあ……」

そう言いながら机の書類を手にとる。

凡例

艦種『艦名』最終状況

合計損害

被弾数

第1分艦隊

・航空戦隊

空母『陸奥』沈没

司令長官戦死 艦長戦死 幕僚全滅

41サンチ砲弾12発 魚雷2本

・防空戦隊

軽巡『梓』沈没

司令官・艦長戦死

4 1 サンチ砲弾2発 1 4 サンチ砲弾多数

第3 駆逐隊 3 / 4 隻沈没

火災発生

1 4 サンチ砲弾・1 2・7 サンチ砲弾多数

第2 分艦隊

・ 打撃戦隊

打撃艦『多良』大破

司令官戦死 艦長戦死 幕僚全滅 航行不能

1 5・5 サンチ砲弾5発 魚雷3本

打撃艦『由布』小破

速度3 k t 低下

1 5・5 サンチ砲弾2発 至近弾数発

・ 水雷戦隊

軽巡『夕張』中破

司令官・艦長戦死

機銃掃射

第1 駆逐隊 4 / 4 隻沈没

隊司令戦死

1 5・5 サンチ砲弾・1 2・7 サンチ砲弾多数

第2 駆逐隊 2 / 2 隻戦場離脱

被害なし

被害なし

「無事に済んだのは混乱して離脱した2駆だけですね」

ほら、『夕張』が銃撃された時ですよ、と真。

「ああ。……あとだな、真は『多良』振り回して長いんだろ？」

「ええ。人事異動は滅多に無いんで」

理由は簡単。異動先がほとんど無いからだ。

「では聞くが、打撃艦というのはどんな艦種なんだ？ 今一納得がいかない」

戦艦としては主砲の数が足りない。巡洋艦にしては遅い。モニター艦にしては豪華。目指すところがよくわからない。

「……そうですね。強いて言うなら高速外洋モニター艦、ですね」

ある程度の速力をいかして敵の有効射程外から41センチ砲弾を送り込む。主要部の装甲は対20センチ防御なので重巡以上と撃ち合うのは不可能、さらにその巡洋艦でも倍居たら対抗不可能。難儀な艦ですよ。と、嬉しそうに言う。

「まあ、元々この艦隊だけで戦うのは精々軽偵察艦隊までで、戦艦なんかが出てきたら連合艦隊から応援がくることになってるんで問題無いといえは無いんですけどね」

「成る程。と、なれば……目標は決まったな」

うん、と一人首肯するプロデューサー。

「あ、南方作戦の件ですね？ それで、米アジア艦隊ですか？ そ

れとも英東洋艦隊ですか？」

「いや違う。……それに、採用されるとは思えんし、多分に俺の思考を見るテストというところだろうからな」

今から新たな作戦を立案するのは間に合わないだろうしな、とプロデューサー。

「じゃ、陸さんの直接支援……ですか？」

少々不服げだ。

「なんだ、やはり砲術屋としては艦砲射撃では不満か？」

「いえ。それに、ボクは水雷屋ですよ。……その、生身の兵隊やトーチカ如きに41サンチ砲が必要ですか？ と、思いまして」

海軍にいと忘れがちになるが、駆逐艦の豆鉄砲でも陸では重加農砲である。

「いやいや、狙うのは戦艦級の砲だよ。でも艦じゃあない。……わかるかい？」

あまり考えた様子を見せずに真が答える。

「……いえ、どこですか？」

「米領フィリピン、コレヒドール要塞の36サンチ連装砲を中心とする重砲群、だ」

これなら打撃艦の41サンチ主砲でアウトレンジできる。良いと思わないか、とプロデューサー。

「……なるほど、良いと思います」

射程と威力だけなら『長門』と同じですからね。と、笑う。そして、ちらりと懐中時計を見た。

「ところでプロデューサー、長官との約束、そろそろじゃないですか？」

「お、もういい時間だな。じゃあ小鳥さん、失礼しますよ」

書類に顔を向けたままの小鳥に一声かけ、腰を浮かせるプロデューサー。

「はい、助かりました。プロデューサーさん、頑張ってくださいね、高木長官は思考過程も説明させますから」

「いえいえこちらこそ……」

でももう少し早く言って欲しかった……。と、呟きながらプロデューサーはその場を後にした。

長官執務室前の廊下

「……まあ可能ですけどね、一応」

「やっぱり不満かしら？」

「あはは、砲術屋の本懐は対艦射撃です。ってやつですか？」

「別に不満じゃないですう。けど、どうも……」

女三人寄ればかしましいとはよく言うが、話題がそれか。

前から歩いてきた雪歩、りっちゃん、そして天海参謀の会話を聞い

た素直な感想だ。余談だが、どうもあいつは苦手だ。なんでだろうな。

「あ、プロデューサー！」

「お、おう。どうしたんだ？　こんなところで」

天海参謀に満面の笑みで声をかけられた。この笑顔がどうもなあ……。

「高木長官に、ですか？」

「ああ、作戦案が出来上がったんですね？」

「ああ……まあ、もう大筋では決まったんだろっ、りっちゃん？」

参謀の半分が呼ばれているのだ。それに、もう開戦は避けられないと聞く。もう一月あるか……。

三人を見ると、皆、目を逸らす。それでもりっちゃんを見続けてみると、耐えきれなくなったのかクチを割った。

「……バレてました？」

「まあ、な。テストみたいなもんだろ？」

まあ、消耗を避けることを主眼においたから安心していてくれ。そう言つと、雪歩がちょっと逡巡してから口を開いた。

「その事なんですが……」

「ん、なんだ雪歩」

「無論、無駄な損害は避けるべきです。けど、海軍に奉公したその日から、皆、もしもの時の覚悟は出来ています。情に流され大義を見失うこと、無きようお願い致します。それに……」

「……それに？」

「……それに、死ぬことによっても、お国のためにはなりますから」

……雪歩の笑顔にこれほど恐怖を感じたのはこれが初めてだった。

「プ、プロデューサー、早く行かれた方が良いでしょう！」

「そ、そうですねっ！ プロデューサーさん！ 高木長官が呼び出すよっ！」

さあさあさあ！ と、二人にノックの暇もなく部屋に押し込まれてしまい、さらに話を聞き終わったあとの高木長官の発言によってこの事を深く考えることは無かった……。

「なるほど、それが君の案か。……宜しい。その線でりっちゃん達と詰めてくれたまえ。」

あ、あと、第3・第4航空戦隊の空母4隻の護衛と米アジア艦隊の搜索・撃滅も考慮してくれ。詳細はこれを見るように」

「……はい？」

だからにこやかに分厚い茶封筒を差し出さないで下さい……。

ちなみに、先に渡された密封命令は、高木長官に渡したら一瞬で消されてしまいました。

長官曰く、「マジックだよ」だそうです。

つづく

第11話 演習1941(2) (後書き)

作者

「大変長らくお待たせしました」

あずさ

「結局音無さんオチでした」

律子

「流石にこんな序盤でキャラ殺してたら誰もいなくなるでしょう」

亜美

「りっちゃんメタい」

作者

「お前ら……。ともかく、いい加減戦争に入らないと……」

伊織

「全くもう！ 早くしなさいよね。」

「じゃあ、意見や感想待ってるわね！」

第12話　ブリーフィング

昼過ぎ

艦隊司令部

大会議室

「　だ。今後とも、宜しく頼む」

プロデューサーが一礼して着席する。

間近に迫った南方作戦行動計画の周知の為に、独立艦隊所属の分艦隊司令官、軍艦艦長、隊司令と艦隊参謀の面々が集まっていた。その冒頭で、改めてプロデューサーの紹介が行われていた。

「うむ。確か、第三分艦隊の諸君とは顔合わせが済んでいなかったな？　では石川君、よろしく」

そう高木長官が指名すると、一分の隙も無く着こなした第一種軍装に、かなり癖のある黒髪を伸ばした女性かが立ち上がった。

「第三分艦隊司令長官の石川実よ」

さて、本来なら各員の紹介と行きたいところだけど……と、横に座っている面々　岡本まなみ、尾崎玲子ら　を見る。

「……まあ、知らない仲でもないわね？　我々第三　」
「ちよつと待って？」

端に座っていた、左右非対称のショートを髪留めでとめた中佐が何

故か疑問形でストップをかける。が、

「艦隊は通商破壊を主任務としていてそれぞれ1コずつの
「ちょ、ちよつと!？」

「仮装巡洋艦戦隊と潜水隊で構成されていて、仮巡戦隊は私の
直率。で、潜水隊の司令は、この水谷絵理伊号第二 潜水艦長が
兼務しているわ」

なけば無理矢理絵理の紹介にもっていった。

「忘れられたかと思った？ 私は水谷絵理、よろしく」

ぺこりと頭をさげる。

「こちらこそよろしく。ところで……」

何かに思い当たったようにPが絵理に問いかける。

「先日、演習で『陸奥』に雷撃かましたのは君か？ 見張りは潜望
鏡すら発見できずに撃たれたみたいだがどこにいたんだ？」

第7話の最後を参照。左舷に魚雷4を撃たれている。

「うん、私の伊二ノイ・ルック・ショット。あれは無音潜航中に聴音だけで射ったから」
「ウチの絵理は聴音雷撃の名人なのよ。射程に踏み込んだらまず生
きて帰れないわね」

言葉少なに答える絵理に、その肩に手をおいて尾崎玲子ことマダオ
(まるで ダメな おば…おざきさん) が被せる。

ちなみに、Pと石川、尾崎、岡本の面々は以前から面識があったり

するのだが、そのあたりの話はまた今度。

「へえ、そいつは凄い」

「おほん。プロデューサー君、そろそろ本題に移ってくれるかね？」

場の雰囲気が増談モードに移行しそうになったのを察した高木長官が今回の本題、南方作戦に移るよう促す。

「はい。えー、本作戦の目的は、南方資源地帯の早急なる奪取による長期不敗体勢の構築にあり、特にA B C D包囲陣により」

「プロデューサー君プロデューサー君」

原稿を棒読みするプロデューサーを、頬杖をつきながら長官が遮る。

「なんででしょう？」

「長い、簡潔に。三行で」

室内が「またか……」という空気に包まれる。新任は大体このタイミングでコレを喰らう。

「……え？」

思わず助けを求めるように出席者の顔を見るが、皆一様にのつのと目を反らす。

「あー、つと……」

油が買えません

蘭印（オランダ領東インド）に奪いに行きます

そのために比島（米領フィリピン）と馬來半島（英領マレー）を占領します

……という所かな。これで理解できたか？」

異論がないのを確認して続ける。

「この方面を担当する南方部隊は、近藤信竹中将直率の南方部隊本隊、南雲忠一中将揮下の馬來部隊、高橋伊望中将揮下の比島部隊、小沢治三郎中将揮下の航空部隊、そして、高木順一朗中将指揮下の遊撃部隊で構成されている」

要するに戦艦と正規空母以外の主力艦・航空機の大半をつぎ込むということだ。

「我々の属する遊撃部隊の任務は比島攻略の支援だ。第三、第四航空戦隊と共同してあたることになっている。ここまでは良いか？」

一旦言葉を切って一同を見回すプロデューサー。

「では、これより戦術的な行動についてへと移る。では、よろしく事前の打ち合わせ通りプロデューサーが着席し、代わって美希が指揮棒をもって地図の前に立つ。」

「はいみんなちゅうもーく。軍令部からの通達によると、11月21日までに出港、30日に沖縄で油槽船1と合流、その後フィリピン東海上の指定海域で待機せよとのことなの」

日本からフィリピンまで引かれた線をなぞりながら言い、隣のフィリピン周辺の拡大地図に移る。

「で、開戦初日には台湾の台南と高雄の飛行場から飛び立った陸攻

が、フィリピンはルソン島のクラークフィールドとイバの飛行場に対して空襲を加えて敵航空機を地上で破壊する予定なの。

でも、爆弾抱えた陸攻は十分届くんだけど、護衛の零戦が届かない
もうちょつと正確に言うつと戦闘を行うにはギリギリしか燃料が持たないの。

そこで

振り返りつつ4隻の平べったい航空母艦のシルエットをぺたりと張り付ける。

「陸攻隊に呼応して小型空母『龍驤』『春日丸』『祥鳳』『龍鳳』の4隻から基地航空隊所属の零戦合計72機を発進させ、敵戦闘機をそーとーすることになった次第なの」

どこからか小さく声がした気がしたがスルーされた。

「IFの任務の一つはこの貧乏な脆弱な小型空母4と油槽船1を本来の搭載機、九六式艦戦/艦攻が戻ってくるまで護衛することなの。翌日以降の任務については律子、さんをお願いするの」

この後、律子から開戦二日以降は米アジア艦隊の捕捉撃滅に専念すること、時期をみて陸軍と呼応してコレヒドール要塞に艦砲射撃を加えることについて説明があった。

そして、あずさんから航路の選定についてと、艦隊行動の秘匿のため、空母『陸奥』、打撃艦『多良』『由布』の無線上における呼出符号が期間限定で変更になることが知らされた。

最後に質疑応答があつて、高木長官によって解散が宣言された。

「ではこれにて散会とする。宴会はこの後予定通り開催される、遅れずに集合する事。プロデューサー君、敵前逃亡は厳罰に処するか

らな？」

皆が三々五々会議室から出ていくなか、書類を片付けていたPに美希が話し掛ける。「ねえプロデューサーさん。ちょっと良いかな？」
「ん？どうした美希、何かあったか」

最後の封筒を鞆に放り込んで美希に向き直る。

「何か、って程じゃないんだけど……ハゲちゃんの機動艦隊って今どうしてるのかな、と思って」

「ハゲとかいっぱいおるぞ……ああ、塚原提督か。知り合いなのか？」

「うん、一昨年の秋ごろだったかな、母艦だった『鳳翔』が練習空母になって連合艦隊に取り上げられたから、大陸の漢口に進出することになって」

漢口は長江と漢水が合流する地点に栄える商業都市で、日本海軍の一大飛行場が存在する。

「その時はまだミキが飛行隊長だったんだけど、丁度漢口上空に来た時に国民党のエスパー爆撃機が奇襲してきて、ミキ達18機で味方が上がって来るまで時間を稼いだの」

「そりゃあ凄いな。でも、そんな話聞いたこと無いが」

そんな話があるなら有名になっても良いはずである。

「お偉いさんが『奇襲を許した上に女に助けられました』なんて言う訳ないの」

「……確かに」

「あと、デコちゃんの九六艦戦が降りた時に脚折って、指揮所前にいたハゲちゃんを轢きかけたってのもあって」

「おいおい、兵学校36期の双壁の片割れを殺しかけたらそりゃあ無かったことにされるわ」

ちなみに、双壁のもう一人は南雲忠一提督である。

「で、機動艦隊がどこに行くか知ってる？」

「いや……一航艦にも同期はいるが最近会ってないしな。戦艦と一緒に内地で留守番じゃ「ハワイね」な……舞さん!？」

「出たのっ!？」

「何？人を人外みたいに。まあいいわ。塚原機動艦隊の初手は、開戦直後のハワイ真珠港奇襲攻撃よ」

自信たつぷりに言い切る人外。

「……一体何故、そういう結論に至ったので？」

決して根拠も無しに言い切る人物ではないことはプロデューサーもわかってはいた。しかし、その根拠が時として常人には理解不能なため（勿論、破天荒な生活も大きいが）、能力の割に昇進が遅かったりする。

「ふふ、すぐ言ったらつまんないじゃない。もうちょっと考えたら？それじゃ、今夜は期待してるわよ？じゃあね」

言うだけ言って手をひらひらさせつつ去って行った。

「つまんない、か。あの人らしいな」

「やっぱり舞はテンサイなの」

「だれがうまいこと言えと。」

まあ、1AFがどこをやるうが関係ない。俺たちは俺たちの任務をこなすだけだろ。じゃあ先に行ってるからな」

Pも書類鞆を小脇に抱えて足早に会議室を後にする。

閑散とした会議室に美希一人だけが残っている。

「……あの呼出符号、多分空母『加賀』符号、参加する艦は空母らしきもの6。てことはミキ達の本当の任務は……」

プロデューサー、IFも全然無関係じゃないってミキは思っな……」

つづく

第12話　フリーフィング（後書き）

真

「突然ですが……」

修羅場トリオ

「第一回、後書きメタメタ補足こゝな〜!」

美希

「このコーナーは、感想欄で質問が相次ぐことを危惧した作者が『聞かれる前に答えておこう。ラジオ形式で』と、いうことで企画したものなの」

雪歩

「後で埋めておくのでどうかご容赦ください」

作者@ブース外

っ（暴力反対!）

雪歩

「まずは、三人の方から同じような質問を頂いています」

真

「「原じゃない方の忠一」さんより『艦隊人事が史実と違わないか？　正直有難いが』

「ハゲちゃん243」さんより『ワシが1AFのシチか。ワシの左腕はどうなってる？』

「1AFはわしが育てた」さんより『なんで1AFの司令長官がわ

た、小沢治三郎提督じゃないんですか？』
です」

雪歩

「皆さん隠す気皆無ですう。」

答えを言つと、史実では39年秋に国民党軍の漢口奇襲爆撃で、塚原二四三提督は左腕を失う重傷を負つて艦隊勤務が出来なくなつて、一航艦の長官が同期の南雲忠一提督になつたんです」

真

「この世界線では負傷しなかったから、塚原提督が1AF長官になる 南雲提督が南遣艦隊長官に 小沢提督が史実で塚原提督のポストだった十一航艦の長官になる……ということなんだね」

美希

「次のお便りは“ヒゲのショーフク”さんから『1AFはともかく、IFってなんぞな？』なの」

真

「IFつてのはIdol Fleet、アイドル艦隊の略で、独立艦隊ともかけてる公式略称だよ。ちなみに1AFは第一航空艦隊のことね」

雪歩

「あ、あと、シチつてのは司令長官の略称です。これに限らず海軍には略語・隠語が多くて、例えば『真ちゃんは女の子にMMK』とか……」

作者@ブース外
つ（ひでえ）

美希

「もててもてて困ってるのはホントなの。」

次、“駆逐艦&通報艦”さんより『特定のキャラの扱いが酷くないですか？』というか何故、零戦が72機なんですか？』だって」

作者@ブース外

つ（そのような事実は全くありません）

つ（平常通り粛々と対応しております）

雪歩

「だ、そうです」

美希

「機数は単に9機中隊×8つてのと、四空母が一度に出せる機体と作戦のために用意できた機体が丁度72機だっただけだしね」

真

「最後に“飛龍は俺の妾”さん。『三十六計逃げるにしかず！』

……………ナニコレ？」

雪歩

「ふふふ……………逃がしませんよ？」

美希

「雪歩、すごく怖い……………」

雪歩

「作者さんの指示ですから」

作者@ブース外

っ（凄味のある笑顔で！）

美希

「あ、そろそろお別れの時間なの！」

作者@ブース外

っ（真の可愛さはナチュラルにある。但し異論は認める）

真

「二人とも、そろそろやるよ！　せーの」

修羅場トリオ

「それでは、ご意見ご感想ネタ振り等お待ちしております（なの）
！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8574p/>

独立アイドル艦隊奮闘記

2011年9月13日15時24分発行